福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1190集

徳永B　1

— 徳永B遺跡第3次調査報告 —

2013
福岡市教育委員会

徳永B 1 —徳永B遺跡第3次調査報告— 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1190集 2013 福岡市教育委員会

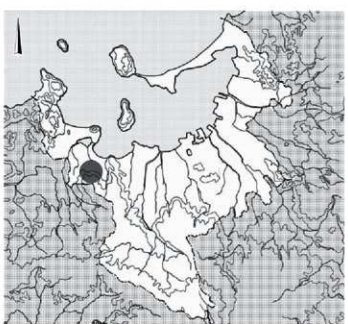
徳永B　1
—徳永B遺跡第3次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1190集

2013年3月22日
発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印　刷　魚住印刷
福岡市博多区大博町8-20

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1190集

徳永（とくなが）B　1

― 徳永B遺跡第３次調査報告 ―



調査番号　0922
遺跡略号　TOB-3

2013

福岡市教育委員会

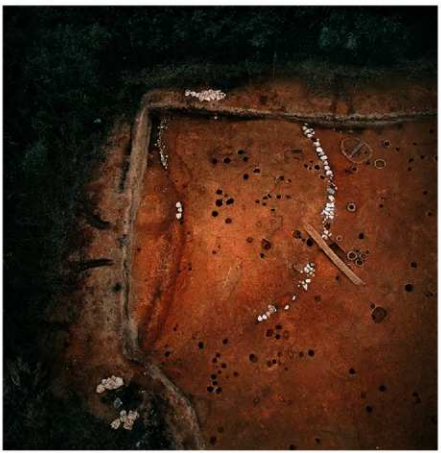


図1　Ⅲ区ST001検出状況（西から）

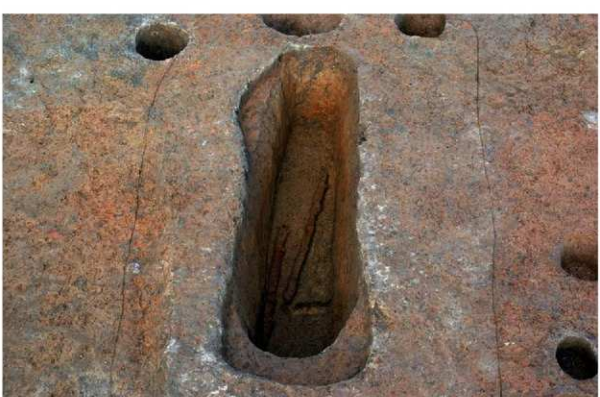


図2　Ⅲ区SX003鉄剣、鉄刀出土状況（南から）

図3　Ⅲ区SX003ガラス小玉出土状況（北から）

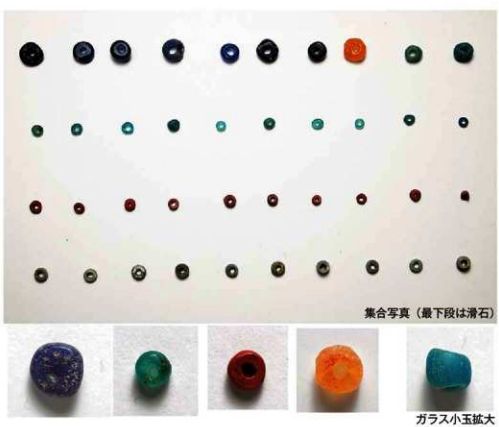


図4　Ⅲ区SX003出土玉類

図5　Ⅳ区全景（上方が北）

図6　Ⅳ区全景（北西から）

図7　土壙墓113玉類出土状況（東から）

序

福岡市の西部に位置する今宿平野は、中国の史書にその名を残す糸島平野の東を占め、歴史的にみても重要な位置にある地域です。しかし今、土地区画整理事業が完成近く、縦横に整備された道路が走り、日々街の姿を整えつつあります。

福岡市では、工事等により現状での保存が不可能となった埋蔵文化財について、記録による保存を図ることとし、そのための発掘調査を行ってきました。本書は、この目的で伊都土地区画整理事業地内において実施した徳永Ｂ遺跡第３次調査の報告書として刊行するものです。

本報告の刊行は、関係各位の多大なご理解とご協力の結果であるとをここに記し、心からお礼を申し上げます。また、本書が今宿平野の歴史について、理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成25年３月22日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

はじめに

1　本書は、2009（平成21）年から2010（平成22）年度にわたり、福岡市西区徳永伊都土地区画整理事業地内で福岡市教育委員会がおこなった、徳永Ｂ遺跡第３次調査の報告である。
2　発掘調査は、文化財保護法57条の３（改正前）に基づく通知を受け、埋蔵文化財保存についての協議を行った結果、福岡市都市整備局（当時）伊都区画整理事務所の依頼により、記録保存を目的として、教育委員会埋蔵文化財２課（当時）が実施したものである。作業は、関係各位のご理解とご協力のもと、円滑に遂行することができた。この場で深く感謝申し上げる。
3　発掘調査は、2009年度Ⅰ区からⅢ区までを埋蔵文化財第２課（平成24年度組織改編により移管し経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課）菅波正人が、2010年度Ⅳ・Ⅴ区を杉山富雄が担当し実施した。本書編集は、菅波と協議の上、杉山がおこなった。
4　出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡　例

1　書名は、埋蔵文化財調査報告書としての利用を考え、遺跡名によることとし、簡略化を図るため埋蔵文化財種別を略し『徳永Ｂ』とした。第１次調査報告書が既刊であるが、現包蔵地登録以前の範囲・呼称「徳永遺跡」を用いていることから、本書を「徳永Ｂ」の第１とした。
2　位置の記録は、伊都土地区画整理事業に伴い設置された基準点（日本測地系）を利用した。
3　図中に用いる方位は国土座標の座標北であり、真北から０°19′西偏している。
4　報告中の遺構記号・呼称はそれぞれ調査に際して用いたものを使用している。報告中の遺構・遺物番号は、Ⅳ・Ⅴ区については、それぞれ登録番号を用いた。

調査地地番	福岡市西区徳永　地内			調査番号	0922
				分布地図番号	2585
工事面積	130ha	調査対象面積	5,890㎡		
調査実施面積	5,890㎡	調査期間	2009年９月７日～2010年11月19日		

〔本文目次〕

Ⅰ　徳永Ｂ遺跡第３次調査の概要
１．調査の経過……1
調査に至る経緯……1
調査の経過……1
２．遺跡の立地と既往の調査……1
徳永Ｂ遺跡の立地……1
既往の調査……1
Ⅱ　徳永Ｂ３次Ⅰ区の調査
１．調査の概要……5
Ⅲ　徳永Ｂ３次Ⅱ区の調査
１．調査の概要……7
２．調査の記録……7
焼土坑　SX001／SX002……7
溝状遺構　SD006……7
Ⅳ　徳永Ｂ３次Ⅲ区の調査
１．調査の概要……13
２．調査の記録……13
円墳　ST001……13
木棺墓　SX002／SX003……13
焼土坑　SX004／SX005／SX006……17
その他の出土遺物……17
Ⅴ　徳永Ｂ３次Ⅳ区の調査
１．調査の概要……35
調査地の現況……35
調査の経過……35
２．区画118及び周辺出土の遺構と遺物……37
⑴　区画118……37
溝135　土壙195……37
⑵　区画115……38
溝138　溝203……38
⑶　区画116……38
溝207……41
⑷　区画117……41
３．区画107出土の遺構と遺物……42
⑴　区画107……42
井戸142　溝144　土壙153　土壙170……42
⑵　盛土110……45
４．調査区東辺部区画出土の遺構と遺物……55
⑴　区画101……55
⑵　区画106……58
溝120　溝121　溝123　土壙166　土壙167　土壙168……59
⑶　区画109……63
土壙墓113　土壙墓114……63
⑷　区画112……65
５．Ⅳ区南辺部の遺構と遺物……68
⑴　区画260……68
石蓋墓154……68
⑵　区画117……69
Ⅵ　徳永Ｂ３次Ⅴ区の調査
１．調査の概要……73
２．Ⅴ区調査の遺構と遺物……73
⑴　区画260……73
⑵　区画117……73
溝218　土壙229……74
Ⅶ　おわりに
１．調査のまとめ……75
２．山ノ鼻２号墳について……75
抄　録

〔図目次〕

図１　Ⅲ区ST001検出状況（西から）……巻頭図版
図２　Ⅲ区SX003鉄剣、鉄刀出土状況（南から）……巻頭図版
図３　Ⅲ区SX003ガラス小玉出土状況（北から）……巻頭図版
図４　Ⅲ区SX003出土玉類……巻頭図版
図５　Ⅳ区全景（上方が北）……巻頭図版
図６　Ⅳ区全景（北西から）……巻頭図版
図７　土壙墓113玉類出土状況（東から）……巻頭図版
図８　徳永Ｂ遺跡の位置（１：50,000）……１
図９　徳永Ｂ第３次調査地点の位置（１：4,000）……２
図10　徳永Ｂ遺跡調査地点位置図（１：1,000）……３
図11　徳永Ｂ第３次調査地点現況地形（１：500）……４
図12　Ⅰ区全体図（1/400）……５
図13　Ⅰ区完掘状況（西から）……６
図14　Ⅰ区表土剥ぎ（西から）……６
図15　Ⅰ区近世墓検出状況（西から）……６
図16　Ⅰ区近世墓検出状況（南から）……６
図17　Ⅰ区隗衣壷検出状況（南から）……６
図18　Ⅱ区全体図（1/300）……８
図19　Ⅱ区土坑実測図（1/40）……８
図20　Ⅱ区出土遺物実測図（1/3）……９
図21　Ⅱ区全景（北から）……10
図22　Ⅱ区全景北側遺構掘り下げ状況（北から）……10
図23　Ⅰ、Ⅱ区完掘状況（西から）……11
図24　Ⅱ区遺構検出状況（北から）……11
図25　Ⅱ区遺構検出状況（南から）……11
図26　Ⅱ区遺構検出状況（北から）……11
図27　Ⅱ区北側遺構検出掘り下げ状況（西から）……11
図28　Ⅱ区SK001（焼土壙）……12
図29　Ⅱ区SK001完掘（西から）……12
図30　Ⅱ区SK002（焼土壙）完掘（南から）……12
図31　Ⅱ区SK002完掘（西から）……12
図32　Ⅱ区遺構面土師器出土状況（西から）……12
図33　Ⅱ区遺構面土師器出土状況（西から）……12
図34　Ⅱ区調査区北側溝状遺構（南から）……12
図35　Ⅱ区調査区北側段落ち（東から）……12
図36　Ⅲ区全体図（1/400）……14
図37　Ⅲ区ST001遺構実測図（1/100）……15
図38　Ⅲ区SX002遺構実測図（1/40）……16
図39　Ⅲ区SX003遺構実測図（1/40）……16
図40　Ⅲ区土坑実測図（1/40）……17
図41　Ⅲ区出土遺物実測図１……18
図42　Ⅲ区出土遺物実測図２……19
図43　Ⅲ区出土遺物実測図３……20
図44　Ⅲ区全景空撮（西から）……21
図45　Ⅲ区全景空撮（南から）……21
図46　Ⅲ区全景俯瞰（北から）……22
図47　Ⅲ区ST001空撮（西から）……22
図48　Ⅲ区SX001（古墳）検出状況（南から）……23
図49　Ⅲ区SX001（古墳）葺石検出状況（西から）……23
図50　Ⅲ区ST001葺石断面（東から）……24
図51　Ⅲ区ST001葺石断面（東から）……24
図52　Ⅲ区ST001葺石断面（東から）……24
図53　Ⅲ区SX002土層堆積（南から）……25
図54　Ⅲ区SX002墓壙掘り方（西から）……25

図55　Ⅲ区SX002墓壙掘り方（南から）……26
図56　Ⅲ区SX002鉄刀、鉄剣出土状況（南から）……26
図57　Ⅲ区SX002鉄刀、鉄剣出土状況（西から）……26
図58　Ⅲ区SX002鉄刀出土状況（西から）……26
図59　Ⅲ区SX002鉄剣出土状況（西から）……26
図60　Ⅲ区SX002完掘（東から）……27
図61　Ⅲ区SX002掘り方（西から）……27
図62　Ⅲ区SX003墓壙掘り方（南から）……28
図63　Ⅲ区SX003鉄刀出土状況（西から）……28
図64　Ⅲ区SX003（木棺墓）土層堆積（南から）……29
図65　Ⅲ区SX003掘り下げ状況（南から）……29
図66　Ⅲ区SX003鉄刀出土状況近影（南から）……29
図67　Ⅲ区SX003鉄刀１出土状況近影（東から）……29
図68　Ⅲ区SX003ガラス小玉出土状況（南から）……29
図69　Ⅲ区SX003鉄刀取り上げ後（南から）……30
図70　Ⅲ区SX003南西隅刀子及びガラス小玉出土状況……30
図71　Ⅲ区SX003南西隅刀子及びガラス小玉出土状況……30
図72　Ⅲ区SX003完掘（北から）……31
図73　Ⅲ区SX003完掘（東から）……31
図74　Ⅲ区SK006完掘（東から）……32
図75　Ⅲ区SK005完掘（東から）……32
図76　出土石器実測図（2/3）……33
図77　SX002、003出土鉄刀、鉄剣……33
図78　Ⅳ区の位置（1：2,000）……35
図79　Ⅳ区北半部（北西から）……36
図80　Ⅳ区中央部（西から）……36
図81　区画118の位置（1：2,000）……37
図82　区画118及び周辺遺構出土遺物（1：3、1：2）……37
図83　溝135・138・207土層（1：40）……38
図84　区画118及び周辺の区画（西から）……39
図85　区画118北辺部の溝（北東から）……39
図86　溝135・136（北から）……40
図87　区画118北辺部の溝（北東から）……40
図88　土壙195（1：40）……41
図89　溝195（西から）……41
図90　区画107の位置（1：2,000）……42
図91　区画107上遺構（1：80、1：40）……42
図92　土壙170（1：40）……43
図93　区画107上出土遺物（1：3）……43
図94　溝144（北から）……44
図95　溝144（東から）……44
図96　土壙170礫出土状況（北から）……45
図97　盛土110遺存状況（北から）……46
図98　盛土110土層断面（1：40）……47
図99　盛土110下包含層最終調査面（1：40）……48
図100　盛土110下包含層出土遺物１（1：1）……49
図101　盛土110下包含層出土遺物２（1：1、1：3）……50
図102　盛土110下包含層出土遺物３（1：2）……51
図103　盛土110遺存状況（北から）……52
図104　盛土110土層断面（南から）……52
図105　盛土110土層断面（東から）……52
図106　盛土110下包含層２層調査状況（北から）……53
図107　盛土110下包含層２層最終面（北から）……53
図108　東辺部区画の位置（1：2,000）……55
図109　区画101上出土遺物（1：3、1：2）……55
図110　区画106（北から）……56

図111　区画101（北から）……56
図112　溝102（東から）……57
図113　区画101（北から）……57
図114　溝120・121・123土層断面（1：40）……58
図115　溝166（1：40）……59
図116　溝167（1：40）……59
図117　溝168（1：40）……59
図118　区画106・区画106上遺構出土遺物（1：3）……60
図119　土壙166（南から）……60
図120　土壙167（東から）……61
図121　土壙168（北から）……61
図122　土壙墓113（1：40）……62
図123　土壙墓113・114（北から）……62
図124　土壙墓113出土遺物（1：3）……63
図125　土壙墓114（1：40）……64
図126　土壙墓114出土遺物（1：1、1：2）……65
図127　土壙墓113・114（東から）……65
図128　土壙墓113（東から）……66
図129　土壙墓113（北から）……66
図130　土壙墓113遺物出土状況（東から）……66
図131　土壙墓114（東から）……67
図132　土壙墓114（北から）……67
図133　土壙墓114鉄刀出土状況（東から）……67
図134　土壙墓114玉類出土状況（東から）……67
図135　Ⅳ区南辺部の位置（1：2,000）……68
図136　石蓋墓154（1：40）……68
図137　石蓋墓113検出状況（東から）……69
図138　石蓋墓154出土遺物（1：2）……70
図139　石蓋墓154竪掘出土状況（北から）……70
図140　石蓋墓154検出状況（北から）……71
図141　石蓋墓154床面検出状況（東から）……71
図142　石蓋墓154床面検出状況（北から）……72
図143　石蓋墓154完掘（北から）……72
図144　石蓋墓154遺物出土状況（南半部、東から）……72
図145　Ⅴ区の位置（1：2,000）……73
図146　Ⅴ区全景（北から）……73
図147　溝218土層断面（1：40）……74
図148　土壙229（1：40）……74
図149　Ⅴ区遺構出土遺物（1：3）……74
付 図　徳永Ｂ遺跡第３次調査区全体図（1：200）

〔表目次〕

表1　出土遺物観察表……5
表2　出土遺物観察表……34

Ⅰ　徳永Ｂ遺跡第３次調査の概要

１．調査の経過

調査に至る経緯

伊都区画整理事業地については、2002（平成12）年度から工事に先立ち、記録保存のための発掘調査を継続して実施してきた。調査は、おおむね事業地東部の今宿地区から西へ向かい、区画整理事業の進捗にしたがって進行しており、徳永地区については、間欠的な試掘・確認調査を挟んで、2007（平成19）年度の徳永Ｂ遺跡第２次調査から本発掘調査に取りかった。

その後、事業地としての手続きが更に進行したことを受けて、2009（平成21）年度になって、山ノ鼻２号墳が立地するとされていた範囲を中心とした区域に徳永Ｂ遺跡第３次調査区を設定し、本発掘調査に着手することとなった。

図８　徳永Ｂ遺跡の位置（1：50,000）

調査の経過（図10）

３次調査区は上述するように、山ノ鼻２号墳が立地するものとされていたことから、その確認に留意しながら調査を進めることとした。

現場作業は、2009年９月７日着手した。調査地の現況は、竹林および灌木の生育した荒地及び墓地であり、それの伐採作業、除却の終了した区域から調査を進めた。そのため、対象地の周辺部かから個々に調査区を設定して調査を進めることとなった。対象地北側にⅠ区を設定し９月14日着手、西側に別区としてⅡ区を10月７日、更に南側にⅢ区を11月９日にそれぞれ着手、調査を行った。残る中央部の伐採及び墓地の除却が完了し、現況測量を行った後、Ⅳ区として表土掘削に着手したのは明けて2010（平成22）年４月15日である。この後、調査中に隣地の手続きが済み、調査可能となったことから、Ⅴ区を設定、９月13日表土鋤取りから作業を開始した。Ⅳ・Ⅴ区を併行し、３次調査を完了したのは2010年11月19日である。調査面積は、Ⅰ区からⅤ区合わせて、5,890㎡となった。

２．遺跡の立地と既往の調査

徳永Ｂ遺跡の立地（図９～11）

遺跡は、今津湾に向かって伸びる段丘上に立地し、北の今津湾岸の低地に面する位置から南は、高祖山山麓裾部までの段丘部のほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地として登録されている。

調査地はその北端部を占める位置にある。西側を高祖山裾へ向かい南へ深く入り込む広い谷により、東側は狭く調査区地点の南まで入り込む谷により開析された、幅60m程で緩く起伏する地形となって残っている。その東に平行する段丘では、高位の段丘面が丘陵状になって南北に並んで残っており、それぞれの最高所に前方後円墳が立地している。調査地は南へ続く段丘面とは僅かな鞍部によって区画された微高地であったことが、現況地形図から読み取ることができる。この微高地の標高10m、西側の沖積低地からの比高は約５mほどである。

既往の調査（図９・10）

徳永Ｂ遺跡第１次調査　今宿バイパス築造に伴う調査として、1988（昭和63）年度福岡市教育委員

会が調査を行った。調査時当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地としては未登録で、事業に先立つ試掘調査で確認されたものである。調査時は、西の谷を間にして対面する丘陵裾の調査区まで含めて「徳永遺跡」と呼称した。その後、福岡市文化財分布地図改訂２版の編集に際して整理を行い、西の丘陵裾部について「徳永A遺跡」（登録番号：福岡市2584）とし、谷を隔てた東側、本地点を含む段丘上の埋蔵文化財包蔵地について「徳永B遺跡」（登録番号：福岡市2585）と呼称、登録することとなった。

１次調査では、2,990㎡を調査し、掘立柱建物、土壙、溝状遺構が検出された。縄文時代、弥生時代、古墳時代後期、戦国時代の土器、石器類が少量出土した*。

図9　徳永B第３次調査地点の位置（1：4,000）

徳永B遺跡第２次調査　伊都区画整理事業に伴う調査として2007（平成19）年度実施した。調査地は、第３次地点の立地する段丘面から西側の谷へ向かって一段下った平坦地である。下位の段丘面か。調査面積は682㎡で、出土した遺構・遺物には縄文時代から平安時代の資料が含まれる。遺構は古墳時代中期の竪穴住居、古代の掘立柱建物、製鉄関連遺構、土器投棄土壙、中世の掘立柱建物等がある。遺物には、中期阿高式をはじめとする縄文土器、古墳時代土師器、古代土師器・黒色土器の他輸入陶磁器、及び石錘等の石製品がみられた。

徳永B遺跡第３次調査　伊都土地区画整理事業に伴う調査として2009～2010（平成21～22）年度実施した。今回報告調査。

徳永B遺跡第４次調査　伊都区画整理事業に伴う調査として2011～2012（平成23～24）年度実施した。古墳、中世の掘立柱建物等を検出。

以上のほか、今回調査地内及び隣地で古墳について確認調査が実施されている。

山ノ鼻２号墳第１次調査　内容確認を目的として1990（平成２）年度実施した。調査は、トレンチにより墳丘形状、規模の確認を行った**。

【註】

*　松村道博 編　1991『徳永遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第242集　福岡市教育委員会

**　小林義彦 編　1993『山ノ鼻２号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第353集　福岡市教育委員会

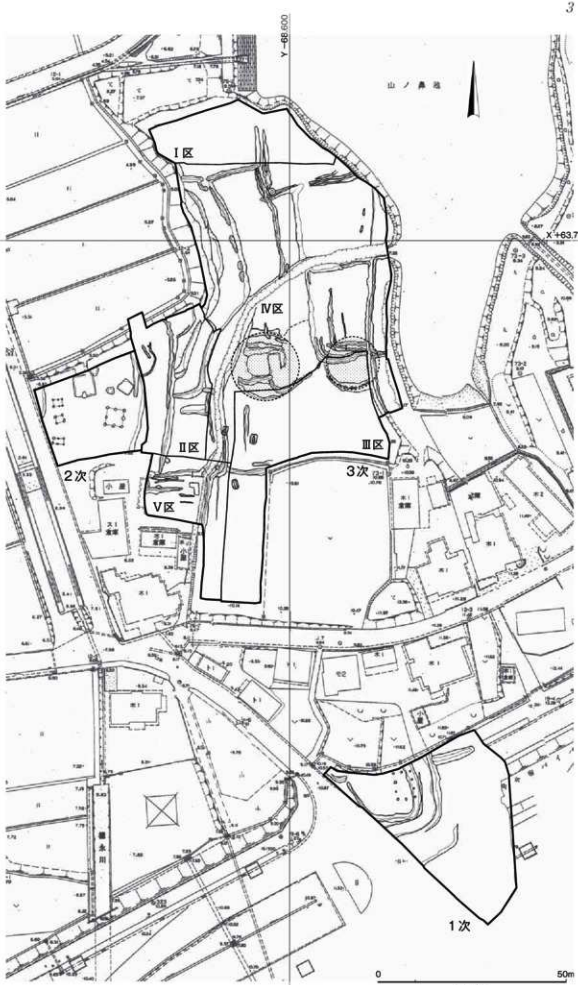


図10　徳水B遺跡調査地点位置図（1：1,000）

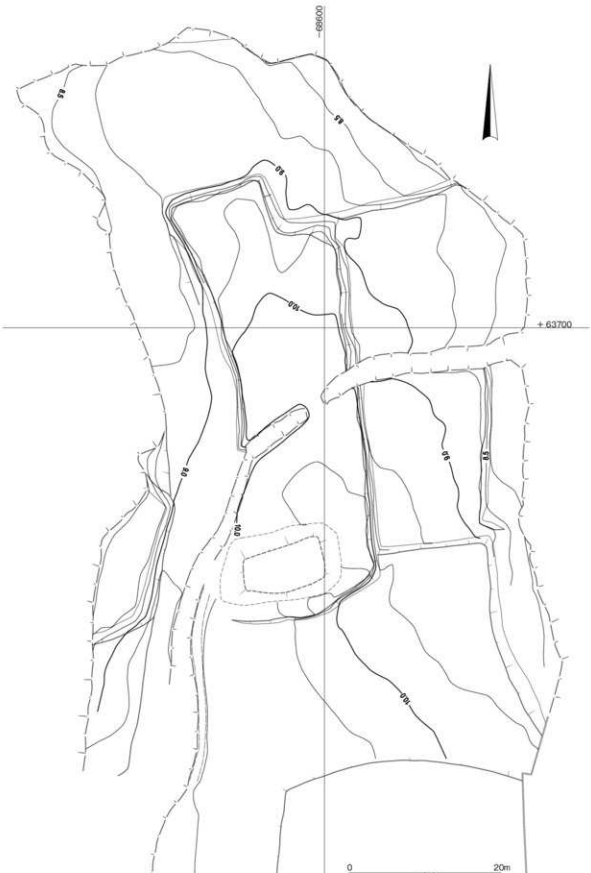


図11　徳永B第3次調査地点現況地形（1：500）

Ⅱ　徳永Ｂ３次Ⅰ区の調査

１．調査の概要

Ⅰ区は調査区の北側で、遺跡の立地する丘陵の先端に当たる。現況は墓地、畑地であった。調査開始時はこの場所は前方後円墳と考えられていた「山ノ鼻２号墳」の前方部の前面にあたることから、関連遺構の存在が想定された。

調査は表土を除去した地表下約40～50cmの淡橙色粘質土を遺構面として行った。現況が墓地、畑地であったため、削平が著しく、旧地形は大きく改変をうけていた。調査区東側は畑の耕作のために掘られたと考えられる幅１mほどの溝が連なる。調査区中央から西側にかけて近世墓が多数分布する。近世墓は陶器の甕を利用したものである。また、陶器の急須などを利用した胞衣壺も検出した。Ⅰ区では近世以前の遺物包含層や古墳に関係するような遺構は確認できなかった。

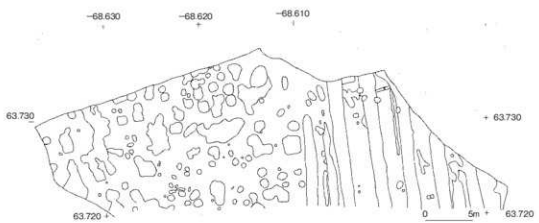


図12　Ⅰ区全体図（1/400）

表１　出土遺物観察表

図	番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器形	法量（器高/口径/底径(cm)）	特　徴
20	1	Ⅱ区　001　埋土中	土師器	皿	-/-/7.6	底面に板状圧痕、色調橙色
20	2	Ⅱ区　001　埋土中	土師器	皿	-/-/9.8	色調橙色
20	3	Ⅱ区　001　埋土中	土師器	皿	-/-/7.1	色調橙色
20	4	Ⅱ区　001　埋土中	陶質土器	甕	-/-/-	色調灰白色
20	5	Ⅱ区　001　埋土中	陶質土器	甕	-/-/-	色調灰色
20	6	Ⅱ区　001　埋土中	陶質土器	甕	-/-/-	色調灰色
20	7	Ⅱ区　006　№２	土師器	皿	1.6/7.9/6.1	色調橙色
20	8	Ⅱ区　006　№１	土師器	皿	2.6/11.7/8.8	底部回転糸切り、色調橙色
20	9	Ⅱ区　005　上面	土師器	皿	-/-/8.8	色調橙色
20	10	Ⅱ区　011　埋土中	黒色土器	椀	-/-/-	黒色土器Ｂ類、色調黒褐色
20	11	Ⅱ区　P23	土師器	甕	-/15.5/-	色調橙色
20	12	Ⅱ区　P23	土師器	壺	-/12.7/-	色調淡黄色
20	13	Ⅱ区　P23	土師器	高坏	-/15.6/-	色調浅黄橙色
20	14	Ⅱ区　P23	土師器	鉢	4.2/16.2/-	色調灰白色
20	15	Ⅱ区　P23	土師器	高坏	-/14.4/-	色調浅黄橙色
20	16	Ⅱ区　北西隅包含層	土師器	皿	-/-/11.4	色調橙色
20	17	Ⅱ区　北西隅包含層	土師器	皿	-/-/9.0	色調にぶい褐色
20	18	Ⅱ区　北西隅包含層	磁器	白磁碗	-/-/-	玉縁口縁
20	19	Ⅱ区　北西隅包含層	磁器	白磁碗	-/-/-	玉縁口縁
20	20	Ⅱ区　北西隅包含層	磁器	青磁碗	-/-/-	同安窯系
20	21	Ⅱ区　下段落差	磁器	青磁碗	-/-/10.4	越州窯系
20	22	Ⅱ区　北東段下包含層	縄文土器	深鉢	-/-/-	色調褐灰色
20	23	Ⅱ区　北東段下包含層	縄文土器	深鉢	-/-/-	色調にぶい褐色

図13　Ⅰ区完掘状況（西から）

図14　Ⅰ区表土剥ぎ（西から）

図15　Ⅰ区近世墓検出状況（西から）

図16　Ⅰ区近世墓検出状況（南から）

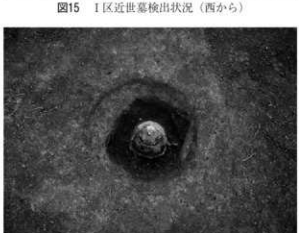


図17　Ⅰ区脇衣壺検出状況（南から）

Ⅲ　徳永Ｂ３次Ⅱ区の調査

１．調査の概要

Ⅱ区は調査区の西側で、遺跡の立地する丘陵の西側斜面で、現況は畑地である。第２次調査地点の東側隣接地で、「山ノ鼻２号墳」の後円部西側にあたることから、関連遺構の存在が想定された。

調査は表土を除去した地表下約40～50㎝の淡橙色粘質土を遺構面として行った。現況が畑地であったため、削平が著しく、旧地形は大きく改変をうけており、遺構の遺存状況は悪い。遺構は調査区北西部を中心に、古墳時代～中世の溝、土坑、焼土坑、柱穴等を検出した。遺物は土師器、陶磁器等が出土した。第２次調査では縄文中期の遺構、遺物が出土したが、ここでも縄文土器、石鏃等が少量出土した。

２．調査の記録

Ⅱ区の遺構は北西部に集中する。時期が明確なものは少ないが、焼土坑、溝状遺構などは古代～中世の位置付けられるものが多い。柱穴からは古墳時代中期の土師器が出土している。第２次調査では該期の竪穴住居跡が検出されている。北西隅は段落ちとなる。

焼土坑（図19）

SX001　調査区北西端斜面に位置する。平面形は隅丸楕円形を呈し、長軸長1.2m、短軸長0.94m、深さ0.55mを測る。壁の上半部が焼成のため、赤変する。土坑内からは炭化物が多量に出土した。遺物は土師器坏、高台付坏等が出土した（図20）。時期は古代と考えられる。

SX002　調査区北西端斜面に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長2.1m、短軸長1.35m、深さ0.35mを測る。壁の上半部が焼成のため、赤変する。土坑内からは炭化物が多量に出土した。床面には10～20㎝ほどの礫が出土した。遺物はほとんど出土しなかった。時期は不明である。

溝状遺構（図18）

SD006　調査区北西側に位置する。直線に延びるもので、長さ約3.5m、幅0.2m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗褐色粘質土で、土師器坏、皿等が出土した（図20）。時期は中世と考えられる。

出土遺物（図20）

１～６はSX001から出土した。１は土師器坏で、口縁を欠く。器面の磨滅のため、底部の切り離しは不明。２、３は土師器高台付き坏で、口縁を欠く。２は断面三角形の低い高台がつく。３は細く高い高台がつく。４、５は陶質土器甕の胴部片で、外面には細い平行タタキ、内面は無文である。器壁は薄く、５㎜ほどである。６は須恵器甕の胴部片で、外面は平行タタキ、内面は当て具痕がある。７、８はSD006から出土した。７は土師器皿で、ほぼ完形である。底部の切り離しは回転糸切りである。８は土師器坏で、ほぼ完形である。底部の切り離しは回転糸切りである。９はSX005から出土した土師器坏で、口縁を欠く。器面の磨滅のため、底部の切り離しは不明であるが、板状圧痕が残る。10はSX011から出土した黒色土器Ｂ類の碗で、底面の外側近くに低い高台が付く。内面にミガキが残る。

11～15は柱穴Ｐ23から出土した土師器である。11、12は小型壺で、11は内面に横方向のミガキが残る。口縁内面は内側に肥厚する。12は球形の体部で、底部を欠く。13～15は高坏の坏部である。13、14は浅く、口縁は直線的に開く。15は脚部が残る。口縁は緩やかに外反する。

16～23は北西隅の段落ちで出土した。16、17は土師器坏で、底部の切り離しは不明。18、19は白磁碗で、玉縁の口縁片である。20は同安窯系青磁碗で、内面には櫛描文。21は越州窯系青磁碗で、見込みには目跡が残る。22、23は粗製の縄文土器片で、22は外面に横方向の条痕が残る。23は口縁片。調整は不明。

図18　Ⅱ区全体図（1/300）

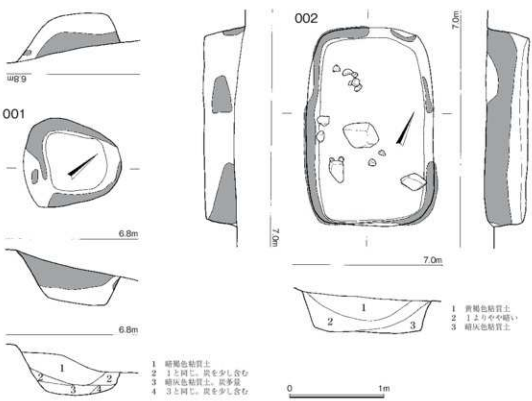


図19　Ⅱ区土坑実測図（1/40）

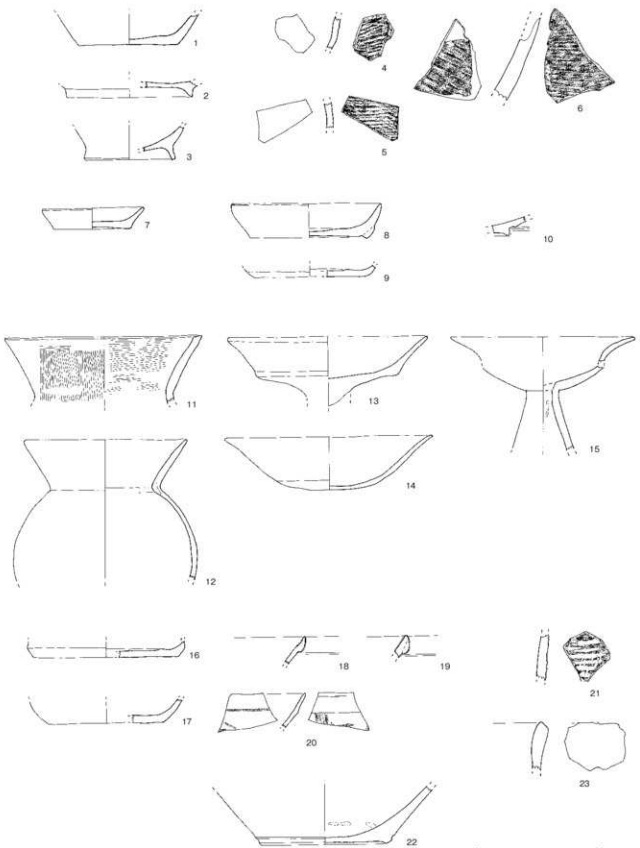


図20　Ⅱ区出土遺物実測図（1/3）

図21　Ⅱ区全景（北から）

図22　Ⅱ区全景北側道構掘り下げ状況（北から）

図23　Ⅰ、Ⅱ区完掘状況（西から）

図24　Ⅱ区遺構検出状況（北から）

図25　Ⅱ区遺構検出状況（南から）

図26　Ⅱ区遺構検出状況（北から）

図27　Ⅱ区北側遺構検出掘り下げ状況（西から）

図28　Ⅱ区SK001（焼土壙）

図29　Ⅱ区SK001完掘（西から）

図30　Ⅱ区SK002（焼土壙）完掘（南から）

図31　Ⅱ区SK002完掘（西から）

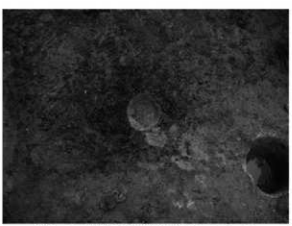


図32　Ⅱ区遺構面土師器出土状況（西から）

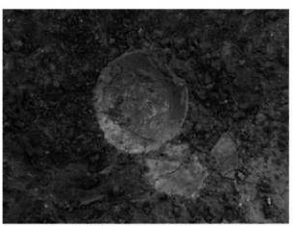


図33　Ⅱ区遺構面土師器出土状況（西から）

図34　Ⅱ区調査区北側溝状遺構（南から）

図35　Ⅱ区調査区北側段落ち（東から）

Ⅳ　徳永Ｂ３次Ⅲ区の調査

１．調査の概要

Ⅲ区は調査区の南側で、現況は畑地で、東側に緩やかに傾斜する。Ⅲ区は調査時には「山ノ鼻２号墳」の後円部の一部が想定されていたことから、関連の遺構の精査行った。しかし、後述するが、想定された後円部は検出されず、前方後円墳であることが修正されることになった。

調査は耕作土を除去した地表下約30～40cmの淡橙色粘質土を遺構面として行った。現況が畑地であったため、削平が著しく、遺構の遺存状況は悪い。遺構は古墳時代中期の円墳１基、木棺墓２基、中世の土坑、焼土坑、柱穴等を検出した。遺物は古墳時代の遺構から土師器、鉄刀、鉄剣、ガラス小玉、中世の土師器、瓦質土器、陶磁器等が出土した。

２．調査の記録

Ⅲ区では山ノ鼻２号墳の後円部は検出されなかったが、調査区東側に円墳１基、南側で木棺墓２基を検出し、古墳時代中期の墓域であることが分かった。古墳や木棺墓以外の遺構は中世～近世にかけて、営まれたと考えれれる。柱穴は多数検出できたが、建物としてまとめることはできなかった。

円墳（図37）

ST001　調査区東側斜面に位置する。墳丘は削平のため、盛土や主体部は遺存しなかった。北側は近世以降の溝により、東側も造成により切られ、墳丘は直径の約3/8が遺存する。直径は約14m前後と推定される。墳丘の裾部に拳大から人頭大の転石の貼石が為される。古墳の周囲には幅３mほどの浅い溝が巡る。遺物は貼石付近から土師器の壺型土器片が出土した。古墳の規模や主体部の構造は不明であるが、出土遺物から古墳時代中期の円墳と考えられる。周溝から中世後半の土器が出土していることから、その時期には墳丘の削平が行われた可能性がある。

出土遺物（図41）　１～６はST001から出土した。土師器の壺型土器の一部と考えられる。１は口縁、２は頸部、３、４は底部片と考えられる。５は周溝から出土した土師器皿で、底部の切り離しは回転糸切りである。６は土師器の鍋である。口縁はくの字に屈曲する。

木棺墓（図38、39）

SX002　調査区西側にある。当初幅0.6m、長さ1.5mほどの土壙と判断し、掘り進めていた。しかし、床面近くで鉄剣等が出土したことから、周辺を改めて精査したところ、掘り下げた部分は木棺墓の内部で、周囲に掘り方を検出した。周溝や墳丘は検出されなかった。木棺の棺材等は出土しなかったが、土層の観察から組合せ式の木棺と考えられる。床面の内法は長さ約1.6m、幅約0.4m、深さは約0.5mを測る。床面は北側に向けて高くなる。掘り方は長さ約2.1m、幅約1.35mの隅丸長方形のプランを呈する。遺物は棺内の床面中央で、鉄剣１、鉄刀１（図42）が出土した。時期は不明確であるが、円墳ST001に近い時期と考えられる。

出土遺物（図42）　１、２はSX002から出土した鉄器である。１は鉄刀で、切先は欠損している。形状は直刀で、片関である。茎には目釘孔はない。刀身と茎の表面に木質の痕跡がある。鞘と柄の一部と考えられる。長さ43.0cmを測る。２は鉄剣である。両関で、茎には目釘孔がある。刀身と茎の表面に木質の痕跡がある。鞘と柄の一部と考えられる。長さ30.6cmを測る。

SX003　調査区西側にある。SX002同様、周溝や墳丘は検出されなかった。木棺の棺材等は出土しなかったが、土層の観察から組合せ式の木棺と考えられる。床面の内法は長さ約1.5m、幅約0.4m、深さは約0.5mを測る。床面は北側に向けて低くなる。掘り方は長さ約2.2m、幅約1.5mの隅丸長方

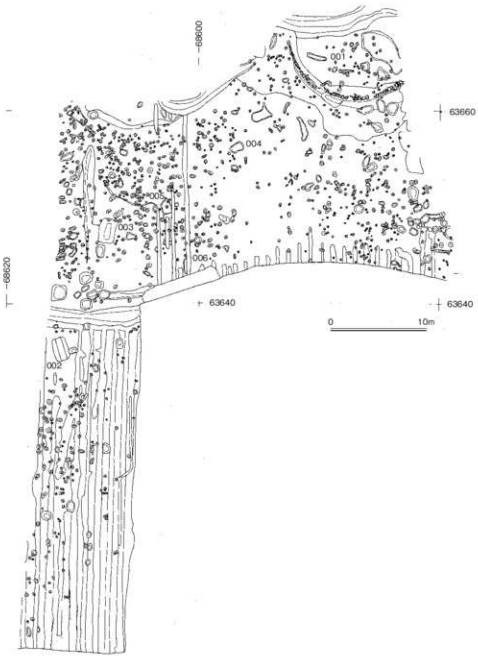


図36　Ⅲ区全体図（1/400）

形のプランを呈する。掘り方の周囲に小穴が存在するが、遺構に伴う可能性がある。遺物は棺内の床面中央で、鉄剣１、鉄刀１（図42）、南東コーナーで、不明鉄器、ガラス小玉、滑石製小玉が出土した。玉類は約150個体ほどある。時期は不明確であるが、円墳ST001に近い時期と考えられる。

出土遺物（図42、43）　３～６はSX002から出土した鉄器である。３は鉄刀で、形状は直刀で、片関である。茎には目釘孔はない。茎の先端は張り出しがつく。刀身と茎の表面に木質の痕跡がある。鞘と柄の一部と考えられる。長さ83.5cmを測る。４は鉄剣である。両関で、茎には目釘孔がある。刀身と茎の表面に木質の痕跡がある。鞘と柄の一部と考えられる。柄には幅２cmほどの革を巻いたような痕跡が見られる。長さ70.2cmを測る。５は不明鉄器である。中程で屈曲する。先端は欠損している。

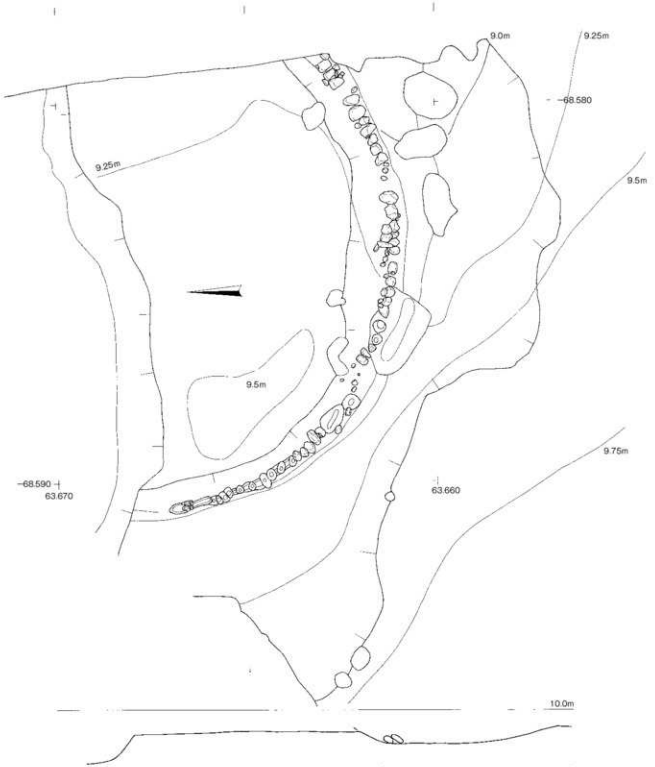


図37　Ⅲ区ST001遺構実測図（1/100）

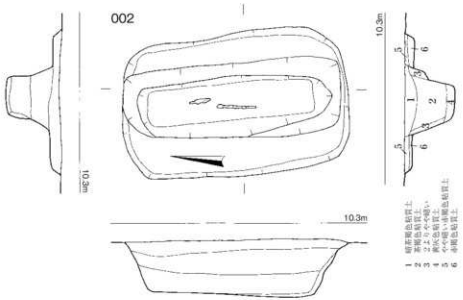


図38　Ⅲ区SX002遺構実測図（1/40）

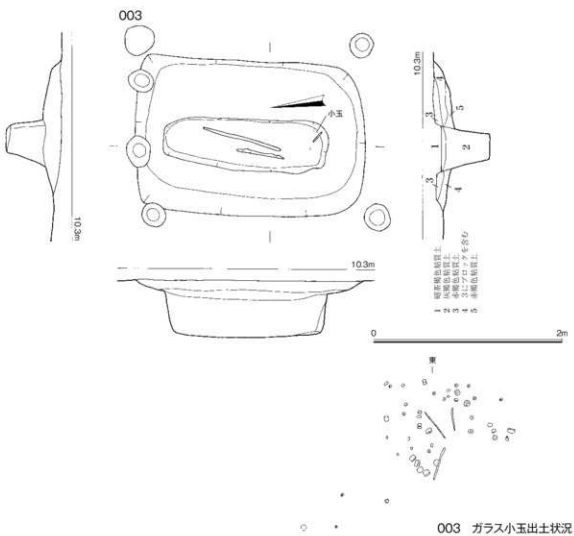


図39　Ⅲ区SX003遺構実測図（1/40）

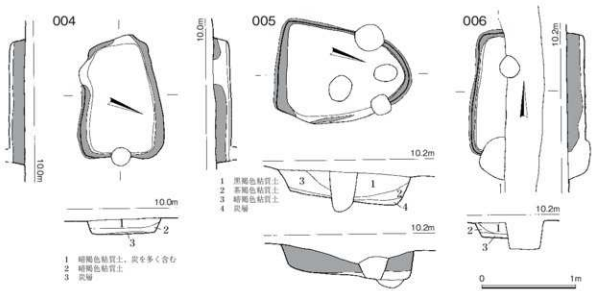


図40 Ⅲ区土坑実測図（1/40）

鑿もしくはヤリガンナか。6は針状の鉄器である。

図42の1～119は図化できた玉類である。1～71はガラス小玉で大きさ、色調が異なる。1～9が紺色で、径0.5～0.6cm、10はオレンジ色で、径0.6cm、11～30は水色で、径0.2～0.3cm、31～33は青色で、径0.2～0.25cm、34～71は赤色で、径0.2～0.25cmとなる。72～119は滑石製小玉である。大きさは径0.25～0.35cmを測る。

焼土坑（図40）

SX004 調査区中央北側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長1.2m、短軸長0.9m、深さ0.15mを測る。壁の上半部が焼成のため、赤変する。土坑内からは炭化物が多量に出土した。遺物はほとんど出土しなかった。時期は不明である。

SX005 調査区中央北側に位置する。平面形は不整台形を呈し、長軸長1.45m、短軸長1.1m、深さ0.25mを測る。壁の上半部が焼成のため、赤変する。土坑内からは炭化物が多量に出土した。遺物はほとんど出土しなかった。時期は不明である。

SX006 調査区中央北側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、遺構の東側は削平される。長軸長1.3m、短軸長0.35m、深さ0.15mを測る。壁の上半部が焼成のため、赤変する。土坑内からは炭化物が多量に出土した。遺物はほとんど出土しなかった。時期は不明である。

その他の出土遺物（図41、図42、図76）

図41の7～27は柱穴から出土した遺物である。7～17は土師器皿、坏である。底部の切り離しは回転糸切りである。18～20、23は土師器の擂り鉢である。内面には擂り目が残る。21は土師器の鍋である。口縁はわずかに外反する。22は瓦質土器の足鍋である。内面には横方向のハケ目が施される。脚部は欠損しているが、接合部分の痕跡が残る。24は軒丸瓦で、瓦当には藤巴の文様が残る。裏面は丸瓦を接合した際の切りこみ痕が残る。26、27は土錘である。

図42の7、8は遺構面で出土した鉄器で、7は刀子、8は鎌である。鎌は柄の装着部が折れ曲がる。

図76の1～11は2、3区から出土した石器類である。1～6は石鏃、7～11は剥片である。12、13は鉛玉である。径1.1～1.5cmを測る。

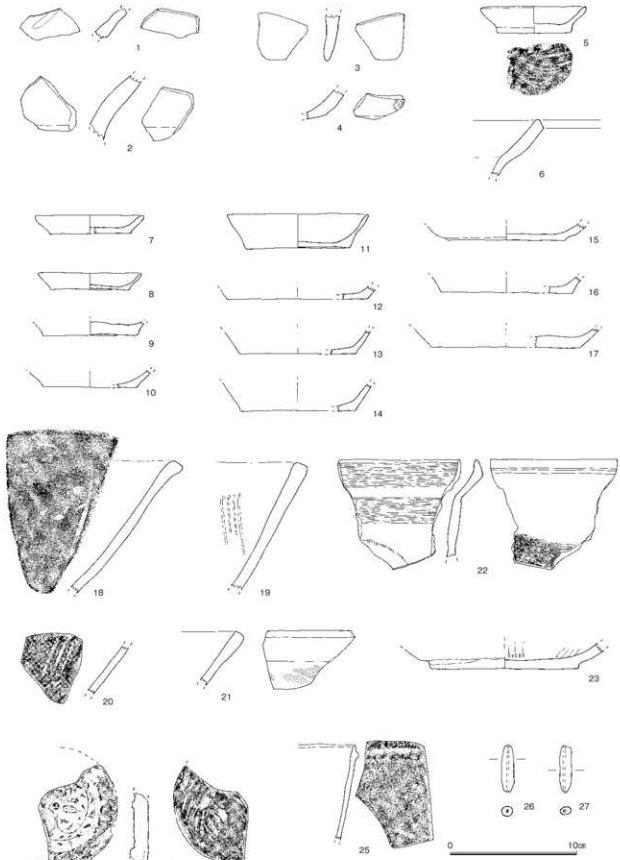


図41　Ⅲ区出土遺物実測図１

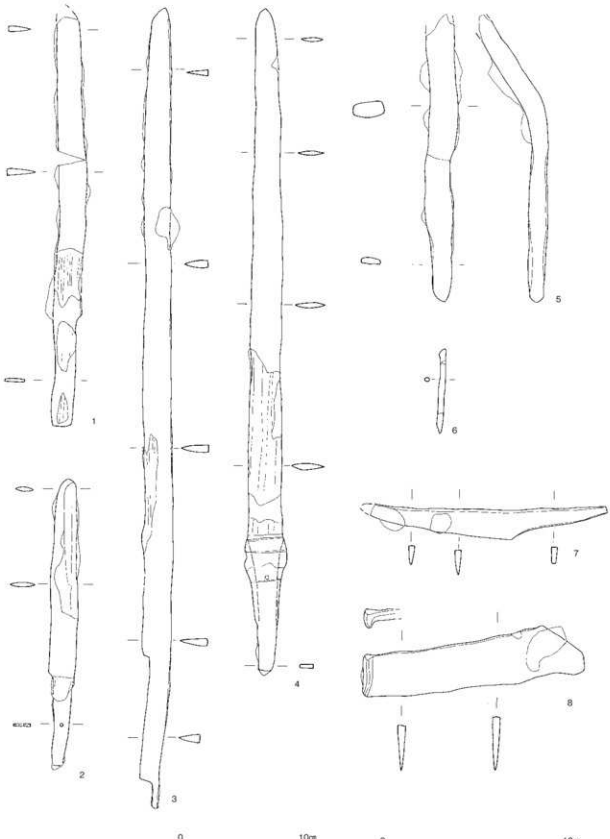


図42　Ⅲ区出土遺物実測図２

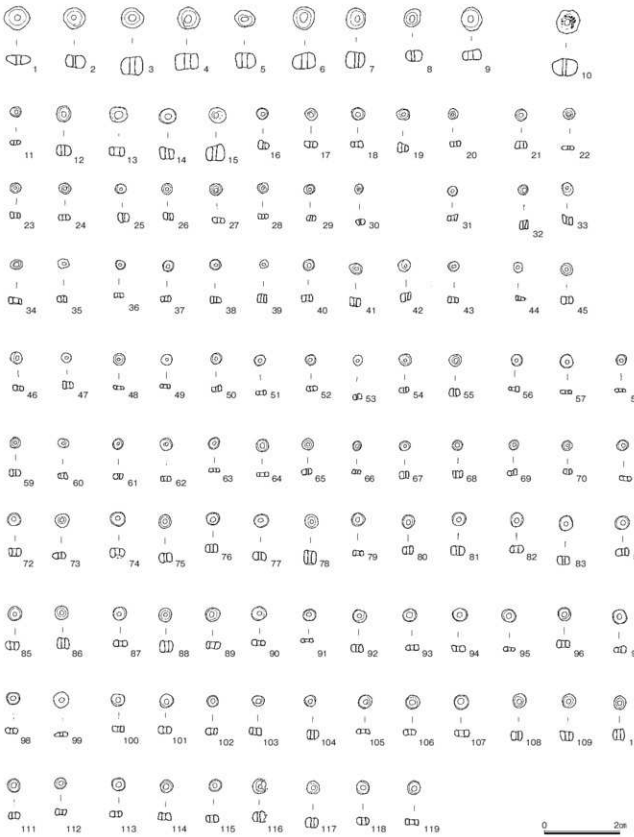


図43　Ⅲ区出土遺物実測図３

図44　Ⅲ区全景空撮（西から）

図45　Ⅲ区全景空撮（南から）

図46　Ⅲ区全景俯瞰（北から）

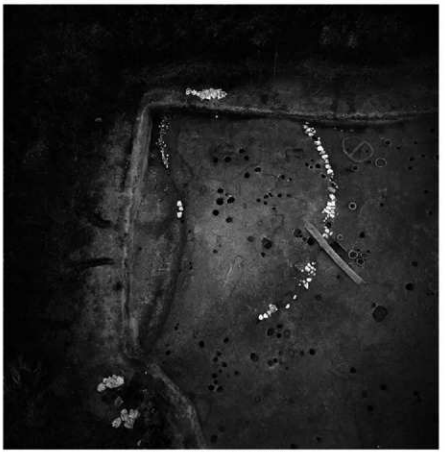


図47　Ⅲ区ST001空撮（西から）

図48　Ⅲ区SX001（古墳）検出状況（南から）

図49　Ⅲ区SX001（古墳）葺石検出状況（西から）

図50　Ⅲ区ST001葺石断面（東から）

図51　Ⅲ区ST001葺石断面（東から）

図52　Ⅲ区ST001葺石断面（東から）

図53　Ⅲ区SX002土層堆積（南から）

図54　Ⅲ区SX002墓壙掘り方（西から）

図55　Ⅲ区SX002墓壙掘り方（南から）

図56　Ⅲ区SX002鉄刀、鉄剣出土状況（南から）

図57　Ⅲ区SX002鉄刀、鉄剣出土状況（西から）

図58　Ⅲ区SX002鉄刀出土状況（西から）

図59　Ⅲ区SX002鉄剣出土状況（西から）

図60　Ⅲ区SX002完掘（東から）

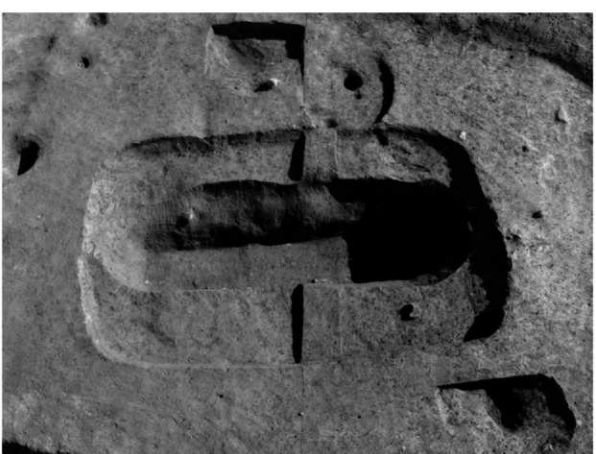


図61　Ⅲ区SX002掘り方（西から）

図62　Ⅲ区SX003墓壙掘り方（南から）

図63　Ⅲ区SX003鉄刀出土状況（西から）

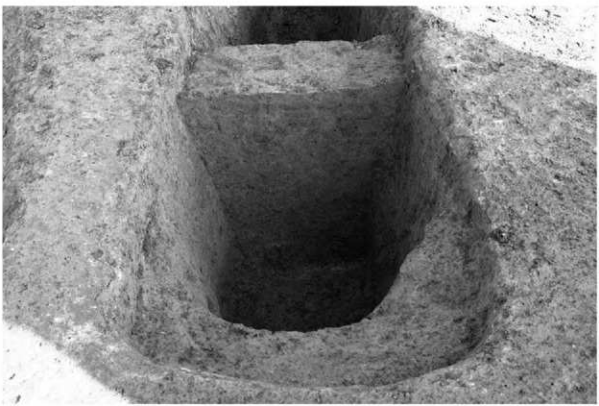


図64　Ⅲ区SX003（木棺墓）土層堆積（南から）

図65　Ⅲ区SX003掘り下げ状況（南から）

図66　Ⅲ区SX003鉄刀出土状況近影（南から）

図67　Ⅲ区SX003鉄刀１出土状況近影（東から）

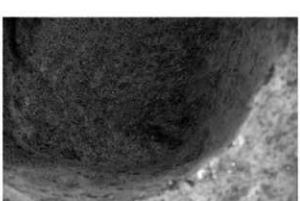


図68　Ⅲ区SX003ガラス小玉出土状況（南から）

図69　Ⅲ区SX003鉄刀取り上げ後（南から）

図70　Ⅲ区SX003南西隅刀子及びガラス小玉出土状況

図71　Ⅲ区SX003南西隅刀子及びガラス小玉出土状況

図72　Ⅲ区SX003完掘（北から）

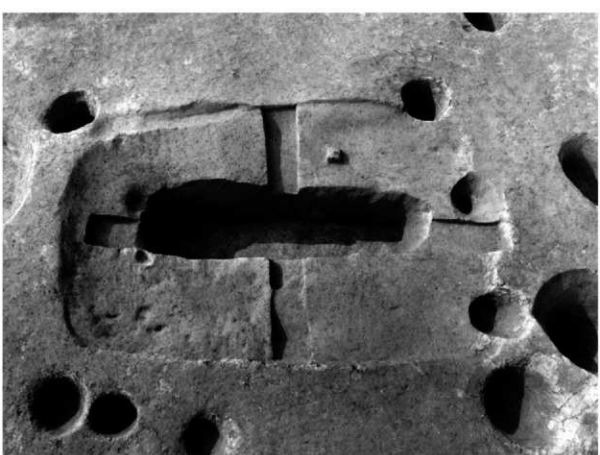


図73　Ⅲ区SX003完掘（東から）

図74　Ⅲ区SK006完掘（東から）

図75　Ⅲ区SK005完掘（東から）

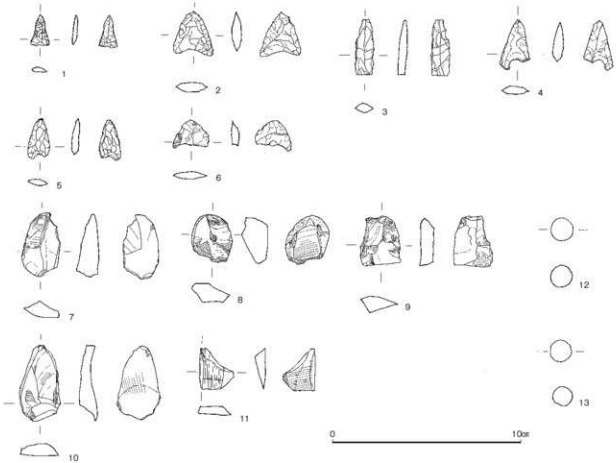


図76　出土石器実測図（2/3）

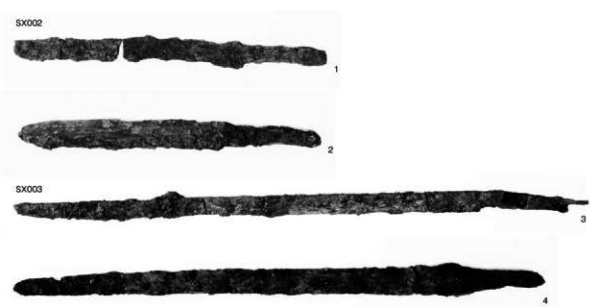


図77　SX002、003出土鉄刀、鉄剣

表2　出土遺物観察表

図	番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器形	法量（器高/口径/底径(cm)）	特　　徴
41	1	Ⅲ区　001(周溝Ⅰ)　貼石土	土師器	壺形埴輪	-/-/-	口縁片。色調明赤褐色
41	2	Ⅲ区　001(周溝Ⅰ)　貼石土	土師器	壺形埴輪	-/-/-	頸部片。色調明赤褐色
41	3	Ⅲ区　001(周溝Ⅰ)　貼石土	土師器	壺形埴輪	-/-/-	底部片。色調明赤褐色
41	4	Ⅲ区　001(周溝Ⅰ)　周溝埋土中	土師器	壺形埴輪	-/-/-	色調橙色
41	5	Ⅲ区　001(周溝Ⅰ)　周溝埋土中	土師器	皿	2.1/8.1/5.7	色調にぶい橙色
41	6	Ⅲ区　001(周溝Ⅰ)　周溝埋土中	土師器	鉢	-/-/-	色調橙色
41	7	Ⅲ区　P41	土師器	皿	1.4/8.3/6.3	色調橙色
41	8	Ⅲ区　P74	土師器	皿	1.3/8.1/6.0	色調褐灰色
41	9	Ⅲ区　P54	土師器	皿	-/-/7.4	色調にぶい褐色
41	10	Ⅲ区　P67	土師器	皿	-/-/7.4	色調浅黄橙色
41	11	Ⅲ区　P54	土師器	皿	2.7/11.0/8.2	色調褐灰色
41	12	Ⅲ区　P110	土師器	皿	-/-/11.0	色調橙色
41	13	Ⅲ区　P71	土師器	皿	-/-/9.0	色調橙色
41	14	Ⅲ区　P71	土師器	皿	-/-/9.0	色調橙色
41	15	Ⅲ区　021　埋土中	土師器	皿	-/-/9.2	色調にぶい橙色
41	16	Ⅲ区　P31	土師器	皿	-/-/-	色調にぶい橙色
41	17	Ⅲ区　014　埋土中	土師器	皿	-/-/11.6	色調にぶい橙色
41	18	Ⅲ区　P29	土師器	擂鉢	-/-/-	色調橙色
41	19	Ⅲ区　P71	土師器	鉢	-/-/-	色調橙色
41	20	Ⅲ区　P28	土師器	擂鉢	-/-/-	色調にぶい橙色
41	21	Ⅲ区　P84	土師器	鉢	-/-/-	色調にぶい褐色
41	22	Ⅲ区　P16	瓦質土器	足鍋	-/-/-	色調灰白色
41	23	Ⅲ区　P104	土師器	捏ね鉢	-/-/11.4	色調浅黄橙色
41	24	Ⅲ区　017　埋土中	瓦	軒丸瓦	径9.6	三つ巴文。色調灰色
41	25	Ⅲ区　020	縄文土器	深鉢	-/-/-	色調黒褐色
41	26	Ⅲ区　P96	土製品	土錘	3.6×0.9	色調にぶい黄橙色
41	27	Ⅲ区　P98	土製品	土錘	3.9×0.9	色調にぶい黄橙色
42	1	Ⅲ区　002　撹内	金属器	鉄刀	43.0/2.7/0.6	先端欠損、鞘、柄の木質が残る
42	2	Ⅲ区　002　撹内	金属器	鉄剣	30.6/2.6/0.5	鞘の木質残る。目釘孔あり。柄は鹿角か
42	3	Ⅲ区　003　撹内	金属器	鉄刀	83.5/3.0/0.8	鞘の木質残る。茎の先端が段をもつ
42	4	Ⅲ区　003　撹内	金属器	鉄剣	70.2/3.4/0.6	鞘の木質が残る。柄は革が巻かれた痕跡。目釘孔あり。
42	5	Ⅲ区　003　小玉周辺	金属器	鉄製品	15.1/1.6/1.0	先端欠損、上位でおり曲がる
42	6	Ⅲ区　003　小玉周辺	金属器	鉄製品	4.5/0.4/0.2	針状の鉄製品
42	7	Ⅲ区　表採	金属器	刀子	12.5/1.5/0.4	先端欠損。
42	8	Ⅲ区　表採	金属器	鉄鎌	11.7/2.8/0.3	完形、片鎬は折り曲げられている。
76	1	Ⅲ区　柱穴中	石器	石鏃	1.6/0.95/0.2	サヌカイト
76	2	Ⅱ区　北西隅包含層	石器	石鏃	2.1/1.2/0.4	サヌカイト
76	3	Ⅱ区　北西隅包含層	石器	石鏃	2.5/2.1/0.5	サヌカイト
76	4	Ⅲ区　P 1	石器	石鏃	1.3/1.9/0.4	黒曜石
76	5	Ⅱ区　近世溝　3	石器	石鏃	2.9/0.9/0.5	サヌカイト
76	6	Ⅲ区　東壁中	石器	石鏃	2.6/1.5/0.4	サヌカイト
76	7	Ⅱ区　北東段下包含層	石器	剥片	3.2/1.9/0.9	黒曜石
76	8	Ⅱ区　北東段下包含層	石器	スクレーパー	3.9/2.2/0.6	黒曜石
76	9	Ⅱ区　北東段下包含層	石器	剥片	2.4/2.1/0.9	黒曜石
76	10	Ⅲ区　東壁中	石器	剥片	2.1/1.7/0.45	黒曜石
76	11	Ⅲ区　東側遺構面	石器	剥片	2.6/2.0/0.8	黒曜石
76	12	Ⅲ区　南端溝上面	金属器	なまり玉	1.1/1.1/1.0	表面風化
76	12	Ⅲ区　008　埋土中	金属器	なまり玉	1.2/1.5/1.1	表面風化

V　徳永Ｂ３次Ⅳ区の調査

１．調査の概要

調査地の現況

本地点については1981（昭和56）年度分布調査の折りに実見し、またその後何度か現況を確認する機会を得ていたが、当時と比較して、発掘作業着手時の状況は、墓地以外では地形の改変等はみられなかった。旧状は一段高く納骨室を備えた墓地があり、或いは墳丘の遺存かとも思われた。調査着手時には墓地にかかる構築物が取り払われて整地されており、低い高まりとして残されていた（盛土110）。これ以外は、耕作地として利用された墳状の区画の状態となっており、中央に墳丘を想定される一段高い墳（南から区画107、区画118）が、その東側に２段、西側に１段の墳状の区画を形成していた（図５・10・11、図84～87、付図）。

調査の経過

第３次調査の眼目に、山ノ鼻２号墳の確認があった。Ⅳ区は想定される山ノ鼻２号墳の前方部及び後円部の一部を含む範囲に該当することから、その検出を意識して作業を進めた。

表土は、全域現耕作土と同性状で粗砂～砂礫の混じる暗褐色土である。表土鋤取りに際して部分的に掘削し、断面を確認したところ、若干の漸移部を挟むが、地山面を直接覆うものと観察された。このため、全面を機力による表土鋤取り対象とした。表土は上部の墳では0.3m程度であったが、東縁部最下位の墳では0.7mと厚く堆積しており、崖状の段差も埋没して傾斜面となっていた。部分的にレンズ状の砂層を挟む部分があり、流水の影響下で堆積したことが窺われた。

調査区南端の墓地の高まりを中心とした位置は後円部とされてきた部分であるが、表土鋤取りが進むなかで、現存墓地の除却工事と、過去に行われた墓地改葬時に掘削、埋め立てが行われていることが分かり、この部分もすべて鋤取った。

表土鋤取り後、人力により調査を進めた。近現代（おそらく現代に近い）の墓地、溝等以外、遺構密度は全体をみると極希薄であった。その中で、調査区南東部において、一部の平坦面（区画106）には多数の柱穴・小穴が分布し、土壙、複数条の溝を確認した。東西の縁部では、古墳時代の土壙墓・石蓋墓を検出した（区画109・206）。

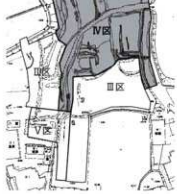


図78　Ⅳ区の位置（1：2,000）

一方、調査区南端に残っていた高まりは旧表土を盛り上げて構築されたもので、その範囲に、先土器時代から縄文時代遺物を出土する包含層が遺存していることがわかり、調査に相応の期間を要することとなった。

調査地は上に述べたように、土地利用に伴う改変が著しく、かつ中央部を横断して北東の山ノ鼻溜池に向かう導水路が掘削された結果、段差、溝などで区画されたいくつかの墳状の平坦部から構成される景観となっている。そのうちの中央部にあって高位の区画に古墳墳丘との関係が考えられてきた。また、調査も現況地形にしたがって進めたことから、それぞれの区画された面に区画として番号（遺構番号と一連のもの）を付し、いわれるところの古墳墳丘との関係を考慮しながら、墳丘推定部の区画を中心に、区画の構成にしたがって報告を進めることとする。

図79　Ⅳ区北半部（北西から）

図80　Ⅳ区中央部（西から）

2．区画118及び周辺出土の遺構と遺物

中央部に残る墳状部（区画118）、北に接して一段下り、調査Ⅰ区に連続する平坦面（区画115）、西に段差をもって接する墳状部（区画116・117）、および各墳上の遺構について報告する。

（1） 区画118（図81・84・85）

従来山ノ鼻２号墳の前方部と復原されてきた高まりである。中央やや東を溝135が南北方向に縦断する。北辺部は溝135を境に東側が８mほど南へずれた位置にあり、北側の区画115とは鍵の手状の段差で区画される。段は直線状で、急斜である。溝135の東側がやや高く残る。西半部は北辺部が緩く北へ傾斜する以外は平坦で、地山礫層面となっている。墓地として利用されていた。墓地は戦時中元岡飛行場建設に伴い移転してきたものである。

遺構は溝135の他に土壙195がある。他に少数の時期不明の小穴を検出したが、覆土に粗砂を顕著に含み、新しいものである。西半部を中心に墓地墓壙が配列する。

溝135（図82・83・86） 地形の尾根筋に沿って南北方向に、緩く蛇行して走る。北端は区画115との段差に続き、段下に沿う溝138の屈曲部に合流する。南端は、調査区を横断する導水路部との交差部で終わる。調査着手時には埋没していた。覆土は砂礫混じり暗褐色土で、地山土塊を含み、流水の形跡は確認できない。底部には南端部を除き無数の落込みが不規則に残り、掘削時の状態を保ったまま埋没したようにみえる。覆土中位で埋置されたほうろう製の薬罐が出土したことから、近代には埋没していたか、途上にあったものと思われる。

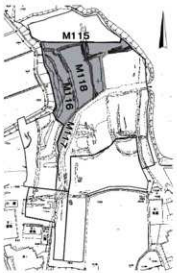


図81 区画118の位置（1：2,000）

溝135出土遺物（図82） 溝135では覆土中からコンテナ１箱ほどの分量の遺物が出土した。大半は肥前系陶磁器をはじめとする近世、近現代の資料である。中世末までの資料が小量含まれていた。

3191は明染付碗口縁部細片である。口唇部の内外面に圏線、外面に文様を描く。3192は、備前系陶器擂鉢細片である。各所を欠き、かなり移動したものか。3194は唐津系陶器皿底部である。内面に胎土目が残る。釉は透明で、内外面に残る、透明で藁灰釉か。3193は瓦質の

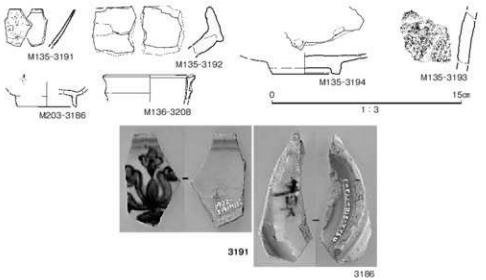


図82 区画118及び周辺遺構出土遺物（1：3、1：2）

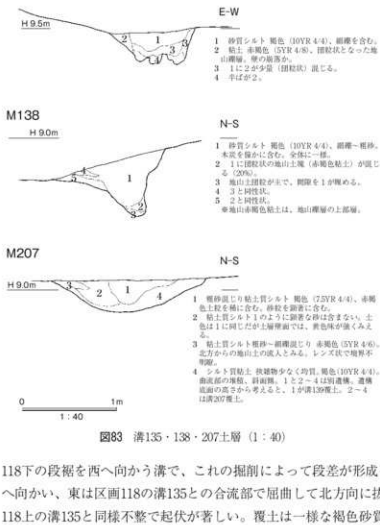


図83 溝135・138・207土層（1：40）

細片資料で、湾曲が殆ど無く、片面に縄目が残る。器形不明。

土壙195（図88・89） 区画118の南端部に位置する。南側が削られる。平面隅円長方形、断面は底面が緩い船底状、南半部は2段掘りとなる。覆土は赤褐色土。長さ2.2m、幅0.7m、深さ0.4m。遺物の出土はなかった。

区画118において、古墳の痕跡、関係する遺物は確認することができなかった。

(2) 区画115

（図5・6・81・84・85）

区画118の北側に接して0.4m前後の段差をもって下る平坦面で、調査Ⅰ区と同一面である。Ⅰ区に続き墓地が広がる。段下に沿い溝138・203が掘削される。調査着手時は完全に埋没し、斜面となっていた。

溝138（図83・85・87） 区画118下の段裾を西へ向かう溝で、これの掘削によって段差が形成される。西端は、崖下へ落ちる溝207へ向かい、東は区画118の溝135との合流部で屈曲して北方向に抜け、Ⅰ区内で終わる。溝底は、区画118上の溝135と同様不整で起伏が著しい。覆土は一様な褐色砂質シルトで、流水の痕跡は認められない。遺物はコンテナ2/3程の分量出土した。ガラス瓶、陶磁器の釉薬も鮮明でごく新しい時期のものと考えられる。

溝203（図86） 区画115東半部で、区画118との境界段下に位置する。浅く、流水の痕跡がある。区画の隅部で屈曲、区画118上の溝217へ接続する。区画118上の溝135と重複して古い。溝203の東の延長線上に東へ下る溝206があり区画109と115を境している。溝203より新しい溝136は屈曲し、溝135と平行する。底部の特徴が溝135・138に似る。遺物は肥前系磁器を含む極小量が溝136・203から出土した。

溝203ほか出土遺物（図82） 3208は香炉口縁部細片である。龍泉窯系青磁か。3186は、染付碗底部細片である。内底面に文字、圏線がある。

以上、区画115を構成する遺構は、近世以降を考えられるものであり、他に古墳の痕跡、また関連する遺物も確認することはできなかった。

(3) 区画116

区画118の西側に沿い、一段低い平坦部で、北側に接する同高度の区画115と溝207によって区画される。区画118との段差は調査前でも明瞭に残る急斜面で、全面に礫層面が露出する。この部分では埋没など径年変化がみられず、古墳の痕跡は確認できない。平坦部西縁部から沖積低地へ下る崖状の傾斜面となるが、途中に細く平坦面が残っている。この平坦面上、段部でも古墳の形跡、関連遺物を確

図84　区画118及び周辺の区画（西から）

図85　区画118北辺部の溝（北東から）

図86　溝135・136（北から）

図87　区画118北辺部の溝（北東から）

認することはできなかった。

溝207（図79・83） 緩く立ち上がる断面を呈し、幅1.6m、深さ0.4mを測る。溝203埋没後、溝139が流れている。覆土中から近世までの遺物がごく小量出土した。

以上、区画116上では、古墳の痕跡、古墳に関係する遺物を確認することはできなかった。

(4) 区画117

区画118南端部と、区画116南端部に接してその中間の高さにある墳である。区画118と116、区画117と116の境界段差が山ノ鼻２号墳の西側墳裾と想定され、区画117側が後円部とされていた。検出した段差は急角度で立ち上がり区画116との比高は0.5m。区画117はこの位置からⅡ区へと続くが、20mほど南の位置から高度を帰ることなく大きく西へ広がり、段の示す線は想定するような円弧を描かない。区画117では、古墳の痕跡、関係する遺物の出土はなかった。

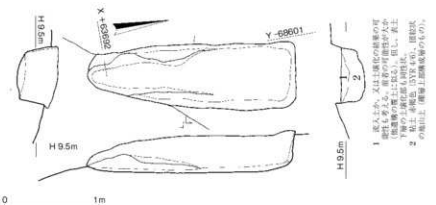


図88 土壙195（1：40）

図89 溝195（西から）

3．区画107出土の遺構と遺物

区画118に連なり、導水路で区分された壇で、西側は区画117、東は区画106と段差をもって接する。南端部に盛土110が位置する。

図90　区画107の位置（1：2,000）

(1)　区画107（図5・80・90）

区画118の南に続き、山ノ鼻2号墳前方部から後円部とされた地点である。旧状は墓地で、南端部には一段高い地盤に墓地が営まれ、旧地形が保存されていた。盛土110として調査した。

大部分は削平された平坦面で、厚さ0.3mほどの表土下は地山段丘礫層が露出する。標高は10m程で、東西の区画106・117との比高は1m程である。南東部は墓地の改葬（墓地111）で破壊されるが、南東隅で旧状を留めており、Ⅲ区で検出した古墳の後背部にあたる位置に凹地が形成されていたことがわかる（図91）。上部は現表土層、下位に褐色粘質土が残る。同様の層が北東部にも僅かに残り、少量の遺物が出土した。

表土鋤取り後礫層上面で近世以降の墓壙以外に溝144、土壙153、土壙170を検出した。盛土110では、遺存する旧表土下に包含層を確認し、調査した。

井戸142　図示しないが、円筒状で深い。底部は擂鉢状で、明らかに帯水した状態の堆積がみられる。上部は均質でよく締まった褐色土で埋まる。遺物は石鏃の出土があったのみである。

溝144（図91・94・95）　盛土110北側を囲む様な位置で検出した。東西方向に9mの長さ残り、僅かに弧状を成す、幅広く浅い溝である。覆土は黒褐色粘質土で、クロボク様である。周辺に同様の覆土で埋まる遺構はみられない。幅1.6m、深さ0.2mを測る。溝の西端近くで拳大～掌大の礫、土器片がやや纏まって出土したほかに石鏃および剥片類が覆土中から散漫に出土した。

溝144出土遺物（図93）　2072・2104～2106いずれも細片資料の土器で、球形体部の下半部とするが不明確。器表の湾曲が小さく大形の器形か。胎土に砂礫を含み、にぶい橙色を呈する。器表は著しく荒れて、大きく剥落する資料がある。調整等も不明。剥落の様態が特異である。

土壙153（図91）　区画107の中央部で検出した焼土壙である。平面は不整な卵形で浅い。覆土は赤褐色粘質土で木炭が混じる。遺物の出土はなかった。

土壙170（図92・96）　東縁部に位置する。複数の土壙が重複したような状態で検出した。

図91　区画107上遺構（1：80、1：40）

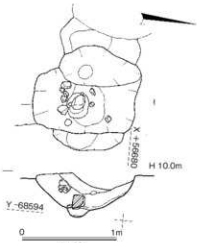


図92 土壙170（1：40）

不整な擂鉢状の土壙で、東西にもやや浅い落込みがある。覆土は黄褐色シルトで、地山2層とするものと同性状である。覆土中から、破砕されたような玄武岩礫が、遺構の壁に沿って滑り込んだような状態で出土した。礫に打点が残るものは無く、節理に沿った割れ面とみえるものが多い。ただ、この位置での破砕とは考えにくい。石材は調査地には分布せず、人為的なものである可能性は高い。また、覆土の様態から縄文時代かそれ以前の可能性も考えられる。礫以外の遺物の出土はなかった。

区画107上出土遺物（図93） 以上報告した他に、区画内で以下のような遺物が出土した。

2198は区画北東部黄褐色土層出土の土師器小形丸底壺である。小破片資料で、器表は剥落し、調整は不明瞭だが凹凸が残り、指押えによる整形か。胎土は緻密で、くすんだ黄赤色を呈す。胴部の復原径15.0cm。2008は盛土110北側の区画107出土。小形丸底壺底部細片か。

3184は、盛土北側裾の近現代の溝143出土の須恵器坏蓋である。口唇部の内面側をやや削いだように仕上げる。胎土は緻密で、復原口径8.3cm。2065は土壙146出土。白磁碗細片で、内面に櫛描文を施す。2210は盛土110北側出土の土師器皿である。小破片資料で、糸切底、復原口径8.2cm、底径6.1cm、器高1.4cmとなる。3240は盛土110南側の溝209出土の土師器皿である。器表荒れて調整不明、復原口径8.0cm、底径6.0cm、器高1.0cmとなる。2733は墓地111改葬後の盛土中出土。唐津系陶器碗で、完存する。内底面に4カ所の目痕が残る。釉は発泡して不透明、ガラス状光沢を呈し明るい灰みの黄色を呈し、露胎部は灰みの黄赤色を呈す。胎土は砂粒を含み堅緻、口径12.5cm、高台径4.8cm、器高3.8cmを測る。

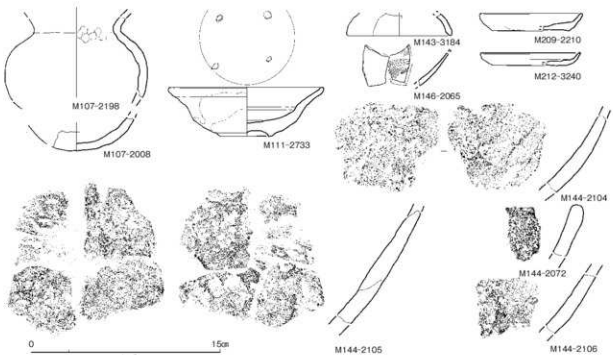


図93 区画107上出土遺物（1：3）

図94　溝144（北から）

図95　溝144（東から）

図96　土壙170礫出土状況（北から）

(2)　**盛土110**（図97～99、103～107）

墓地の基礎部として遺存したものである。旧状は周囲に擁壁、石垣等で囲まれているが、墳丘の遺存を思わせるような高まりで、納骨室出入口が南面して設けられていた。また、東側は区画107より一段高い平坦面となっていた（墓地111）。納骨室は古墳の埋葬施設または抜き跡を転用した可能性も考えたが、結果としてその痕跡は認められず、墓地墓壙との関係からも新たに掘削されたものであることがわかった。また、この部分の土層断面観察から、現状の高まりには旧地表面が残り、一部は盛土によることがわかった（図97）。

盛土110上では、現表土層直下で盛土層となる。この面で近世墓地の墓壙、その残欠が盛土部を切り込んで残ることを確認した。盛土110東の平坦面は、先述したように墓地改葬に伴う掘削土を盛り上げたもの（墓地111）で、除去すると南側のⅢ区と同高度の面となり、盛土110から比高が0.5～0.8m程の段落ちとなっている。盛土南北側は、墓地の造営に伴う整地、盛土が行われて、砂礫を顕著に含む有機物混じりの層が堆積している。北側ではそれに埋没して溝143が、南側では212を検出した。いずれも弧状に盛土110を巡るが、出土遺物から近世以降のものとわかった。西側ではそのまま下位の区画117へ下る斜面となっている。結果として、盛土層110は近世の溝で区画されて東西に長い楕円形状に残る高まりとなっている。上面は比較的平坦で、東西10m、南北５m程の規模となり、東側1/3の大半が納骨質により破壊されている。この状態で北の区画107との比高1.2m、南のⅢ区側とは比高1.1mの段差がある。

表土鋤取りから表土層検出までに出土した遺物の大半は、近現代の墓地に関わるものであった。そのほかにナイフ形石器、石鏃、縄文土器の出土があったが、古墳にかかわる遺物の出土は確認できな

図97　盛土110遺存状況（北から）

かった。一方、北側の溝143での拳～掌大礫の纏まった出土や、区画107西肩部で礫の集積がみられた。Ⅲ区で古墳の検出もあったことから、付近を含めて古墳の可能性も考えられた。このような情況から、古墳の痕跡が遺存する可能性を考えながら掘り下げ作業を進め、地山層まで調査を行った

盛土110土層（図98・103・104）　盛土110の調査は２m格子を基準とし、各区画境界での観察を行いながら掘り下げた。また、東西、南北を通した畦を残し土層を観察、記録した。図98に東西・南北方向の土層断面を示す。断面位置で、盛土頂部は標高11.0mの位置にある。地山面は黒色土上面となるが、南北断面では北端が標高10.7m、南端では標高10.4mとなりやや南へ傾斜しているようにみえる。東西端方向では、起伏はあるが標高10.5mを前後する。

地山１層は、クロボク様の黒色シルトで、旧表土として台地部の調査で目にするものと同性状である。地山２層とするのは、黄褐色シルトであり、粗砂が少量混じる。底面は不整で、下位の地山３層上面で、一見遺構の落込みのように見える部分もある。地山３層とするのはより赤みの強いシルト層である。礫層の一部か。遺物を出土するのは１層から２層までである。調査は２層下面まで行った。１層から３層まで火山灰とわかる変化は観察できなかった。地山１・２層が遺物包含層である。

盛土層は、この地山１層に直接載り、その一部を削り込むような状態となっている。１層～３層を、掘り上げて塊状のまま盛った部分と、団粒状に砕けた土壌を盛った部分とがある。前者が下部に、後者はそれの上に盛られている。下位の盛土が大きく起伏し、その窪みを埋めるように上部層が積まれていることがわかる。施設の床部など意図的な構築物の可能性も考慮して観察したが、確認できなかった。盛土部からは、地山層由来と考えられる土器、石器類が出土した。

盛土110及び包含層出土遺物（図100～102）　Ⅳ区出土遺物1,114件のうち、盛土110部出土遺物は691

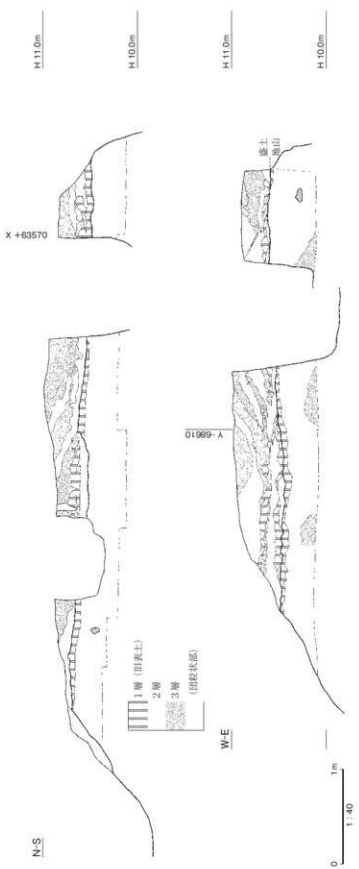


図98　盛土110土層断面（1：40）

件を登録する。うち石器類は648件であり、更に石器と分類した資料は48点、石核とした資料は８点である。土器は34件記録した。うち、縄文土器としたのは21点である。また、焼土様の焼成物が出土している。遺物の出土状態に上下関係は把握することができなかった。

石器とするうちの９点はナイフ形石器の類、48点は石鏃である。ほかに石斧、叩石などが含まれる。石核は各時代のもの８点が出土した。以下、別遺構出土の関連資料も含め報告する。

ナイフ形石器類を図100に示す。図の１・２・４段（2019・2017・2685・2392、3160・2628、2127・2881・2100）はナイフ形石器、３段に台形石器を示す（2611・3059・3143）。ナイフ形石器は、石器長軸を基準として両側辺に刃潰し加工を行う２側辺加工のもの（１・２段）と、片側のみに行う１側辺加工のもの（４段）とがある。更に前者は比較的小形のもの（１段）と大形のもの（２段）とに分かれる。ここでは大小により、石材、長幅比に違いがみられる。前者は黒曜石製で、幅が狭い、後者は

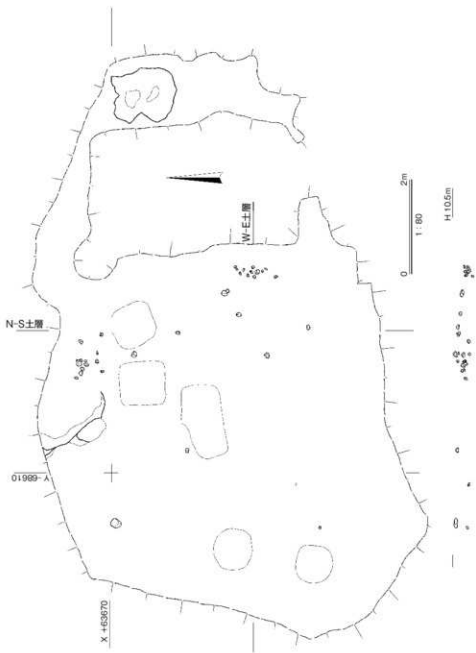


図99　盛土110下包含層最終調査面（1：40）

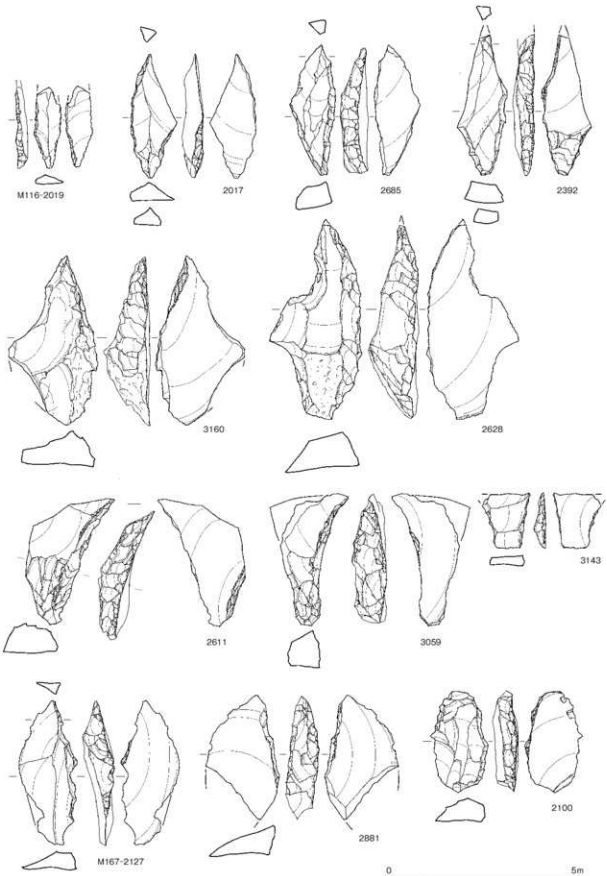


図100 盛土110下包含層出土遺物1（1：1）

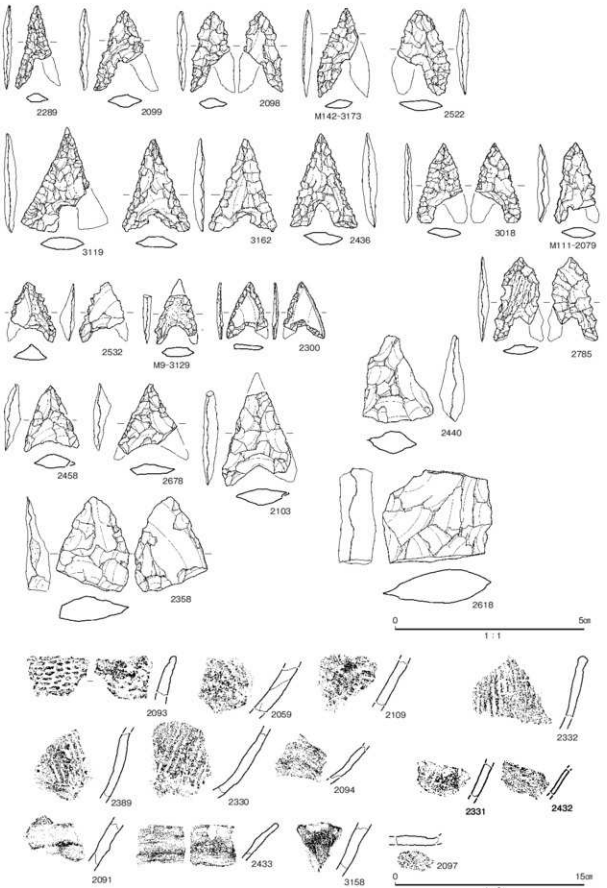


図101　盛土110下包含層出土遺物2（1：1、1：3）

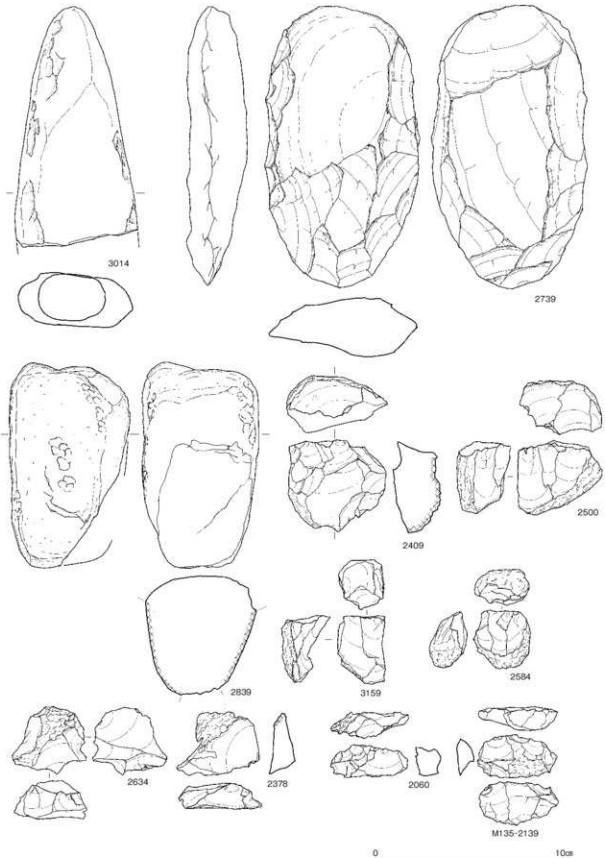


図102　盛土110下包含層出土遺物３（1：2）

図103　盛土110遺存状況（北から）

図104　盛土110土層断面（南から）

図105　盛土110土層断面（東から）

図106　盛土110下包含層２層調査状況（北から）

図107　盛土110下包含層２層最終面（北から）

玻璃質安山岩とする光沢がより強く灰色気味の、やや脆い感じのガラス質石材製で、幅広の器形となっている。素材はいずれも縦長の剥片で、2019を除き素材打点が石器の上位に位置し、左刃のものが多い。2392は裏面基部加工がみられる。

1側辺加工のナイフ形石器のうち、2127・2881は素材に横長剥片を用いている。特に2127は比較的粗い剥離による鋸歯縁状の初物加工が特徴的である。2100は尖端部が不明瞭である。2127は黒曜石、2881・2100は玻璃質安山岩とする石材である。

台形石器のうち、2611・3059は大形でいわゆる枝去木型台形石器、3143は小形で百花台型台形石器とする石器である。3059が玻璃質安山岩、他は黒曜石である。

図101に石鏃、両面加工石器、土器を示す。

石鏃はⅣ区から39点が出土した。そのうち全形を復原できる資料18点を、基部の加工により分類、図示する。図1段（2289・2099・m142-3173・2522）は長脚鏃とする資料である。側縁が脚部端に向かい外反気味のもの（2289・2099・2098）と内湾気味のもの（3178・2522）とがある。石材は2289が安山岩の他はすべて黒曜石。図2段（3119・3162・2436）は基辺の中央部を一段抉り込んで、鍬形鏃とする資料である。3162が安山岩、他は黒曜石。図2段3018・2079・2785と図3段2458・2678・2103は基辺部の抉り込みが半円形状、山形となり、側辺部は短い脚状となる。前者の身が長く、尖端近くで屈曲する。3129（溝9）は、縁部を除く表裏面を研磨している。また、2300は表裏に素材の剥離面を残し周縁部のみを調整する。とくに図上右側辺は折折れ面でそれの片縁のみに調整を行っている。3129・2785が安山岩、2532が頁岩かとみられるほかは黒曜石製。

図4段（2458・2678・2103）は基部を緩く山形に抉り込む。2440は、凸基となるが、周縁調整が粗い、2358は基部にあたる部分に折れ面を残し、別の分類とすべきものか、或いは未成品とすべきものかもしれない。すべて安山岩製。2618は石鏃としては大形で、上下の部分を欠き、原形が不明、石槍状の両面加工石器か。安山岩製。

図101下段は、縄文土器とする資料である。図の1段（2093・2059・2109）は楕円押型文土器である。2093は口縁部破片で、口唇部に向かいやや薄くなる。横走する押型文が内外面に施文されている。他は体部破片で、外面に施文するが、遺存状態不良。図1・2段（2332・2389・2330・2094）は条痕文土器である。2332は口縁部とみえる破片で、肥厚する口唇部をもつ。2330は体部下部の破片か、いずれも外面に短い単位の貝殻条痕文が残っている。いずれも早期土器か。図2段2331・2432は無文部の破片である。図3段2091は、周囲方向の撫で調整により低い山形の隆帯が形成されている。外反する体部とした。2433も周囲方向の撫で調整が行われる。口縁部で、薄い。外反する器形とする。前期土器か。3158・2097は胎土に多量の滑石粒が混じる。3158は体部、2097は平底の底部となり、中期土器か。

図102に大形石器、石核を示す。3014は磨製石斧で刃部を欠失する。玄武岩製で風化が顕著、断面楕円形。2739も玄武岩製、風化が著しく、加工状態か不明瞭である。図上表面（図左）の一部に礫面をのこし、裏面には素材主剥離面が残るものとみえる。周縁部は広い剥離面で整形しているものとみるが、一部は礫面がのこるものか。縁辺の調整は部分的である。礫器、もしくは刃部の整形が不明瞭であるが石斧ともみえる。

2839は磨石とする。角柱状の礫を利用し、側面に磨り面が残る。磨り面の一部は剥落する。他の側面、稜部、下端面には敲打痕が残されている。砂岩製。

石核には剥片剥離作業面と打面との位置関係が明瞭なもの（2409・2500・3159・2584）と剥離作業面が頻繁に転移している両面石器状のもの（2634・2378・2060・M135-2139）とがある。また先土器時代、縄文時代資料が含まれている。前者は先土器時代の石核かと思われるが、2584は縄文時代の資料かも

しれない。いずれの資料にも打面調整、東部調整は認められなかった。石材は2409・2500・2060が安山岩、2378が玻璃質安山岩のほかは黒曜石。

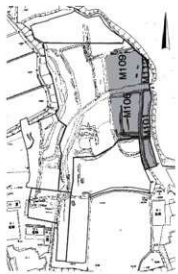


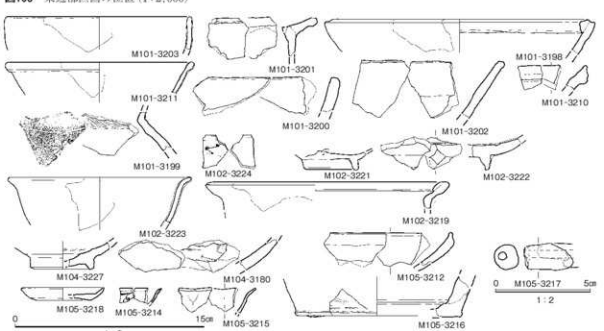
図108　東辺部区画の位置（1：2,000）

4．調査区東辺部区画出土の遺構と遺物

中央の壇状の区画107・118の東に沿い、一段下位にあり山ノ鼻2号墳基底部とされていた区画（106・109）及びさらに東に段落ちする区画（101・112）がある。

（1）　区画101（図108・111～113）

Ⅳ区東縁部、山ノ鼻溜池に面した壇状の平坦部である。一段高い区画106から1.5m、Ⅲ区調査面から1.8m下位となる。0.8mの厚さで表土が堆積していた。南北方向から西辺崖下に沿い溝が走り、中央部で合流、屈曲して溜池となっている谷方向に落ちる（図113、溝102～104）。北端部でも溜池方向に屈曲する。水流はかなりあったものか、礫の洗い出しが顕著であり（図112）、混じって近代までの遺物が出土した。東縁部の段下は、表土とは不整合の



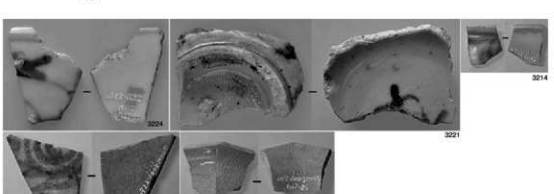


図109　区画101上出土遺物（1：3、1：2）

図110 区画106（北から）

図111 区画101（北から）

図112　溝102（東から）

図113　区画101（北から）

覆土で埋没する。山ノ鼻溜池構築・改修時の掘削が及ばなかった谷部埋積層が遺存するものか。

区画101出土遺物（図109） 区画101遺構検出中崖部から小量の遺物が出土した。3203は龍泉窯系青磁か、口縁部が立ち上がり、鉢とする。口縁部復原径15.0cm。3211は小形の玉縁をもつ白磁碗である。口縁部復原径15.0cm。3201は瓦質土器鍋口縁部細片。京都型瓦質土器とされるものと形態が一致する。胎土は粒状性あり、細礫を含む。3198は瓦質土器捏鉢か、口縁部に周回方向の撫で調整、復原口縁部径20.5cm。3200は土師質土器火鉢か。胎土緻密で内外面とも撫で調整。3202は瓦質土器。器壁が薄く、鍋とする。3210は須恵器壺口縁部細片、古墳時代か。

溝102出土遺物（図109） 区画101北半部の西辺部の溝である。大半は近世以降の遺物で、混じって以下の遺物が出土した。3224・3221は染付碗である。釉は青みがかかって透明、ガラス状光沢。3224は口縁部細片で口唇部内面に1条、外面に2条の圏線。3221は底部破片、釉は高台内面に及ぶ。高台内膨隆部を箆削り取り。高台部径4.5cm。3222は龍泉窯系青磁碗底部細片、内底面外周に凹線による圏線、内部に印花文を施す。3223も龍泉窯系青磁碗か、上半部破片で素文、復原口径14.7cm。

溝104出土遺物（図109） 区画101南半部を区画し、南の調査区外へ続く溝である。溝102と同様洗い出し礫などに混じり出土した。3227は唐津系陶器碗底部で高台内面まで施釉、施釉部は褐色みの明るい緑色。内底面に目痕が残る。3180は龍泉窯系青磁である。体部下部の細片で、内面に片彫りの箆描き文様を施す。

段落ち105出土遺物（図109） 覆土から小量の遺物が出土した。3218は土師器皿である。糸切底で復原口縁部径6.5cm、底部4.4cm、器高1.0cm。3214は染付碗口縁部細片である。端反りで口唇部直下の内外面に圏線、外面に花弁状の文様を描く。3215は白磁多角坏である。稜部の突出部を口縁部で面取りする。3212は瓦質土器擂鉢口縁部細片である。3216は備前系陶器壺の底部か。外面に周回方向に短い単位の刷毛目調整痕が残る。内面は周回方向の撫で調整。復原底径13.1cm。3217は土錘である。土師質で中央部が僅かに膨らむ。

(2) 区画106（108・110）

区画107と区画101にはさまれた平坦面である。旧状は畑地であったものか。現表土層で覆われていたことから機力で除去した。区画118との段は面を揃えた斜面である。区画101との段は不整な崖状となっており、北に向かって低くなっている。前者では径年変化が感じられない。区画106地形に沿う南北に長い長方形で、南辺部と続く西辺部に沿って複数状の溝が順次掘削されて、一段高いⅢ区と区画107との境を成している（溝119・121・122～124）。区画内方から西・南へ向かい順次削平拡張を進めていった結果ではないかと思われる。その過程でⅢ区で調査した古墳（SX001）を切り崩していったものと思われる。溝121の内側では小穴が多数検出された。そのうちの幾つかでは、柱痕跡、根固めとおぼしき礫を検出したが、建物として復原するこ

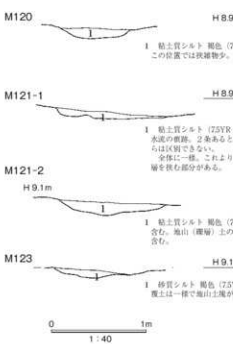


図114 溝120・121・123土層断面（1：40）

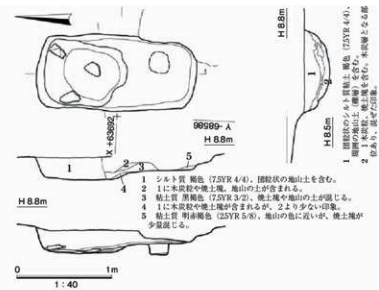


図115　溝166（1：40）

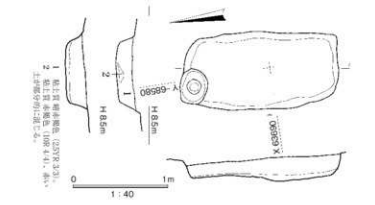


図116　溝167（1：40）

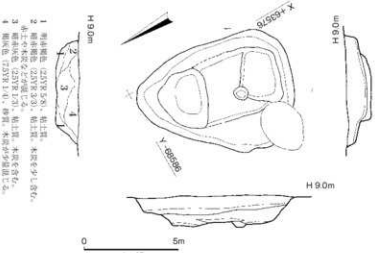


図117　溝168（1：40）

とはできなかった。また、土壙も分布している。

溝120（図114）　溝119と重複して新しい流れ。断面はごく緩く立ち上がる。覆土は褐色シルトで一様。遺物の出土はなかった。

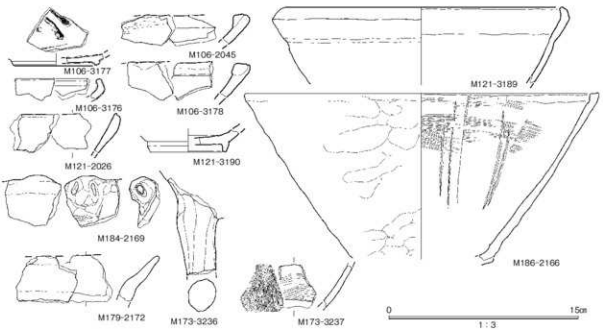
溝121・出土遺物（図113・118）　溝119・120よりやや外方にあり北方向へ長く残る。断面・覆土の性状は溝120に同じ。覆土中から遺物が小量出土した。2026は土師器鍋、3189は瓦質土器片口である。

溝123（図113）　区画の南西部外方よりの溝である。断面形状は他に同じ、覆土に地山土塊が混じる。

土壙166（図115・119）　区画北半部で、土壙167と平行する位置にある。平面で隅円長方形、断面は半円形状。北半部が一段低く偏平な礫が3ヶ所に配置された状態で出土した。覆土は北半部が褐色シルト、南半部では木炭・焼土塊混じりの薄層を挟む。南半部は別の落込みと重複しており、或いはその結果か。長さ1.7m、幅0.8m、深さ0.3m。極小量の遺物が覆土中から出土した。土師器鍋の細片がある。

土壙167（図116・120）　土壙166と並んで東に位置する。やや胴張りのある長方形で、暗赤褐色土で埋まる。北西角に柱穴を検出したが重複して新しい。長さ1.7m、幅0.8m、深さ0.3m。遺物は土師器坏皿の細片が極小量出土したほかにナイフ形石器が出土した。

土壙168（図117・121）　南西部で検出した焼土壙である。2段掘りとなり、上部は不整な三角形状、



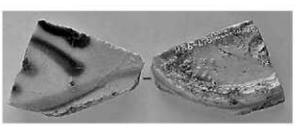


図118 区画106・区画106上遺構出土遺物（1：3）

図119 土壙166（南から）

図120　土壙167（東から）

図121　土壙168（北から）

下部は長方形状である。覆土は暗赤褐色で木炭混じり。壁は部分的に焼ける。長さ1.7m、幅は上段で1.2m、下段で0.7m、深さは0.3mである。遺物は土師器坏ほか破片が極小量出土した。

区画106上出土遺物（図118）　遺構検出時および個別に報告しない遺構出土遺物を示す。

3177は染付皿底部である。内底面に描く文様は深い青色に発色する。高台部径6.8cm。3176は龍泉窯系青磁盤とみられる口縁部細片。2045は瓦質土器擂鉢とみられる資料、3178は瓦質土器鉢で、いずれも口縁部細片。2169は内耳鍋の口縁部細片。把手部の穿孔は片側からの刺突によっている。小穴164出土。2172は土師器壺口縁部か。上下端部を欠き詳細不明。赤褐色を呈す。弧状の落込み179出土。179は風倒木痕状で、褐色シルトで埋まる。3236は瓦質土器足鍋の脚部破片である。暗灰色を呈し、内

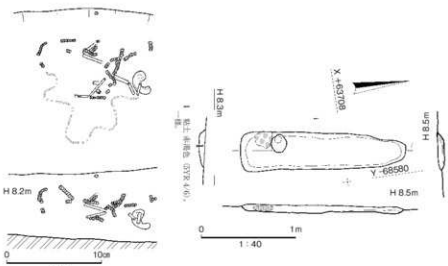


図122　土壙墓113（1：40）

図123　土壙墓113・114（北から）

面僧に煤状の付着物が残る。3237は土師器火鉢口縁部である。外面に雷文の押し型文様を施す。3236・3237は雨裂状の凹地173出土。2166は土師器鍋小破片。口径28.1cm、器高は13cm強を復原できる。小穴186出土。

以上、区画106上で古墳の痕跡を確認することはできなかった。

(3) 区画109（図108）

区画106と導水路を隔てて北に位置する。西側に一段高い区画118とは比高１m程の段により区切られる。この段が山ノ鼻２号墳の墳裾推定線に一致する。段は急斜で、古墳を想定できる変化は確認できなかった。区画北西部が区画106の高さにほぼ一致し、北東方向に緩く傾斜する。区画の東縁部近くで南北に縦列方向で並ぶ土壙墓113・114を検出した。それ以外に遺構は検出できなかった。遺物は極小量の石器類が出土したのみである。

土壙墓113（図７・122～124・127～130） 前述のとおり土壙墓114と同一軸線上にあって、北に位置する。平面形は細長く不整な長方形状、底部近くの部分のみが遺存する。覆土は一様な赤褐色土で、長さ1.8m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。墓壙南端付近の遺構確認面直下から床面にかけて玉類が纏まって出土した。出土状態から糸に通した状態で副葬されたことがわかる。壁から流れ込むような状態で出土していることから、棺或いは蓋の上に置いて埋葬されたことも考えられる。

土壙墓113出土遺物（図７・124） 勾玉、管玉、臼玉が出土した。なお、遺存状態の良い部分は切り

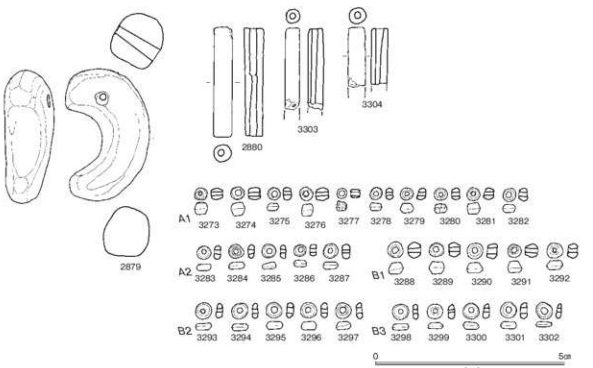


図124 土壙墓113出土遺物（1：3）

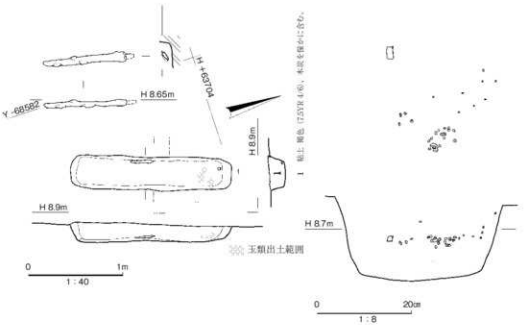


図125 土壙墓114（1：40）

取り、出土状態で保存している（図122）。

2879は勾玉である。片側から穿孔する。石材は薄い灰緑色、顕著な流理がみられ硬質、断口均質な粒状性を示す。碧玉あるいは溶結凝灰岩か。切り取り部に1点みえる。2880・3303・3304は管玉である。2880は完存資料で、両方から穿孔する。長さ2.9cm、径0.5cm、石材は勾玉2879と同質だが、他の管玉は脆い。切り取り部に7点みえる。3273以下は滑石製臼玉である。原位置を離れたものを取り上げた。完存317点、破損240点。側面が膨らんで樽形或いは稜を成して算盤玉状となる。端面の孔辺が窪み凹面となるものがある。製作過程によるものか。長さ（高さ）と径の関係により群に分けてみた。径が0.3cm弱のA群、0.3～0.4cmのB群。更に長短（高低）でA群を2分、B群を3分して図示する。長さは1群で0.2～0.3cm、2群で0.2cm前後、3群で1.5～0.2cm前後となる。

土壙墓114（図123・125・131～134） 土壙墓113の軸線上、南に位置する。平面隅円長方形で、断面逆台形状を呈す。当初土壙墓113と同程度の深さとみたが、断面での観察により更に深いことを確認した。長さ1.7m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。覆土は褐色土で地山層と同性状、僅かに木炭粒を含む。墓壙北端部で、勾玉・ガラス丸玉・滑石製臼玉のほかに櫛かと思われる皮膜状の遺物を検出した。また、中央部の西側壁に沿った床面から鉄刀の出土があった。北端部の出土情況を図125右に示す。玉類は東側壁から覆土中位に向かって流れ込むように分布する。また種別と平面上の分布から、丸玉に勾玉が加わるA1群、丸玉のみのA2群、臼玉のB群に分かれる。勾玉は瑪瑙製で片側からの穿孔。丸玉は長さ（高さ）と側面の状態から、ごく短く（低く）側面が平滑なA群、側面が多面体状となるB群、長さが径に近く側面が平滑なC群、多面体状となるD群とに区分できる（図126）。C群を長さで3分した（C1～C3）。A群は長さ0.3cm、径0.8cm。B群は長さ0.3～0.4cm、径0.6～0.7cm。C群は長さ0.4～0.7cm（平均0.5cm）、径0.6～0.7cm（平均0.6cm）。D群は長さ0.5～0.6cm（平均0.5cm）、径0.5～0.6cm（平均0.6cm）となる。多くが半透明で、暗い青色に発色し、2PB3/5から2PB2/3.5の幅がある。滑石製臼玉は長さの小さい部類が主である。鉄刀2720は茎端部を欠失し、関の位置を覆う金具が遺存する。鞘金具か。現存長21.8cm、身幅1.5cm。

(4) 区画112（図108）

区画109から一段下がって東に位置する。東縁部に山ノ鼻溜池へ落ちる段差がある。小穴、溝等を検出したが、遺物の出土はなかった。

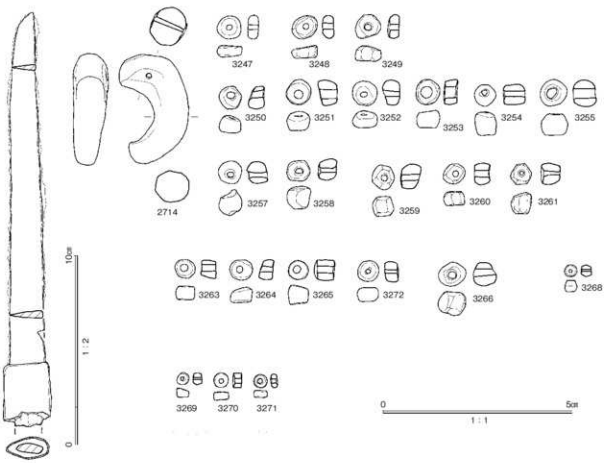


図126　土壙墓114出土遺物（1：1、1：2）

図127　土壙墓113・114（東から）

図128　土壙墓113（東から）

図129　土壙墓113（北から）

図130　土壙墓113遺物出土状況（東から）

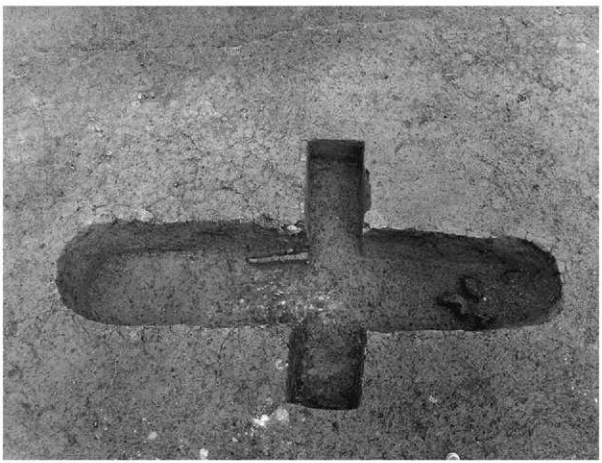


図131　土壙墓114（東から）

図132　土壙墓114（北から）

図133　土壙墓114鉄刀出土状況（東から）

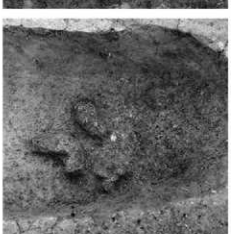


図134　土壙墓114玉類出土状況（東から）

図135　Ⅳ区南辺部の位置（1：2,000）

5．Ⅳ区南辺部の遺構と遺物

区画107南へ一段下がる平坦地で、Ⅲ区に隣接して同一の平坦面を区画260とする。西側は一段下位にⅡ区から続く区画117が位置している。前述したように117の西縁部が山ノ鼻２号墳の後円部裾の位置と復原されていた。

（1）区画260（図135）

区画107・盛土110南辺部では西に下る凹地が形成されている。Ⅲ区につながる小穴、土壙の分布がある。小穴は不整、土壙は近世以降のものである。小量の遺物が出土した。導水路の法面に露出して石蓋墓154を検出した。

石蓋墓154（図136・137・139～144）　地形に沿い南北方向に軸をもつ。上部掘形の西側1/3を欠く。このため石蓋が西下方向へずり落ちている。広い長方形の掘形中央に墓壙を掘削している。

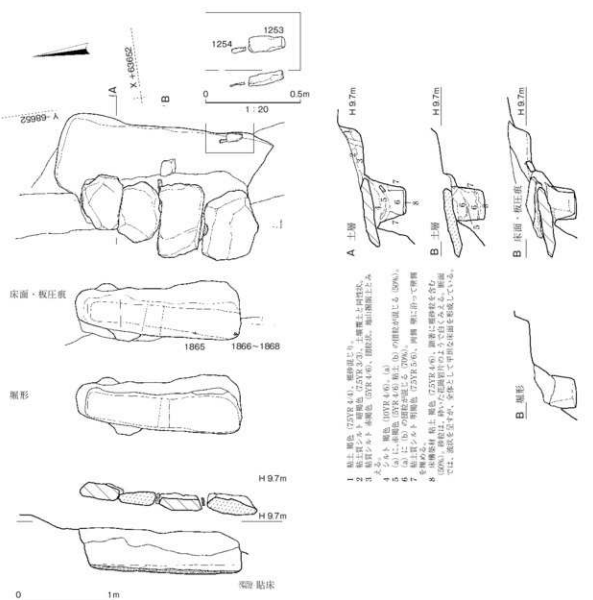


図136　石蓋墓154（1：40）

1段目掘形南東隅で鉄斧と鉄器片が出土した。墓壙は隅円長方形で断面逆台形状。一段目掘形に載せて幅0.5～0.7mの盤状礫で蓋をする。石材は1点が玄武岩、他は花崗岩。

墓壙上部は流入した土層で埋まる。下半部の断面、掘り下げ面に直線状の変化が現れ、両側壁に沿い板が当てられていたものとみられる。小口部では確認することができなかった。床面には、細礫(細かく砕いた花崗岩礫片とみえる)混じりの粘質土を貼っている。墓壙床上南端部西壁沿いで竪櫛が、やや北へ離れた西壁際で銅鏡破片が出土した。

石蓋墓154出土遺物(図138・139) 2253は1段目掘形で出土した鍛造鉄斧である。錆により袋部の詳細不明。長さ18.1cm、刃部は僅かに曲刃となる。刃幅7.0cm。2254は鉄斧2253横で出土した。断片資料で、茎の様な形状である。長さ3.3cm。2865は、墓壙床面出土の銅鏡である。錆のため形状不明瞭、平素縁で極薄い。竪櫛は3点纏まって出土した。櫛歯は確認できず漆塗膜のみの遺存であり、樹脂で固化、土壌に固定して取り上げた。

(2) 区画117(図134)

ここでは区画260との比高1m程段落ちする平坦面で、先述したようにⅡ区へ続き、緩く傾斜しながら西方へと広がっている。Ⅱ区では鍵の手に折れた先で段部を更に下位の区画が切る位置で区画116が終わる。

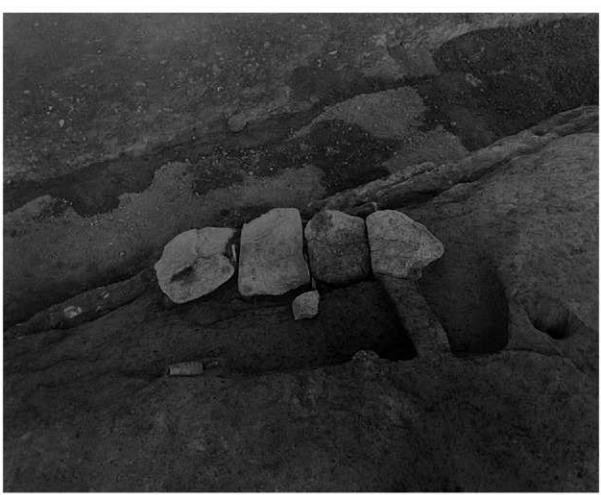


図137 石蓋墓113検出状況(東から)

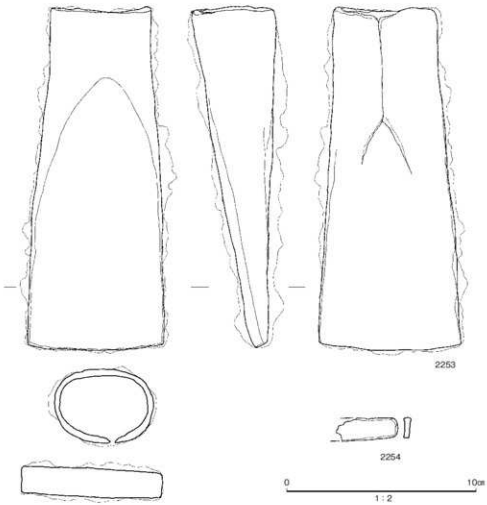


図138　石蓋墓154出土遺物（1：2）

図139　石蓋墓154竪御出土状況（北から）

図140　石蓋墓154検出状況（北から）

図141　石蓋墓154床面検出状況（東から）

図142　石蓋墓154床面検出状況（北から）

図143　石蓋墓154完掘（北から）

図144　石蓋墓154遺物出土状況
（南半部、東から）

Ⅵ　徳永Ｂ３次Ｖ区の調査

１．調査の概要

Ⅳ区調査中に、事業手続きが進行し隣接地が調査可能となったことを受けて設定、調査に着手した。調査は、Ⅳ区と併行した。Ⅳ区調査と同様の見方をすると、Ⅲ・Ⅳ区に続く区画260、0.5m程の比高で西に一段下った区画117の調査を行ったことになる。区画117上を導水路が南北に走るが、この地点では既に埋め立てられていた。

図145　Ⅴ区の位置（1：2,000）

２．Ⅴ区調査の遺構と遺物

（1）区画260

区画260の南西縁部にあたる平坦面で、調査面で段丘礫層が露出し、礫が散布する。遺構は散漫に分布する。柱痕跡を残す柱穴を検出したが、建物として復原することはできなかった。遺物は遺構から小量出土した。

（2）区画117

Ⅱ区、Ⅳ区に続く平坦面だが、この位置で西へ広がり、傾斜を強めて西の低地へ落ちてゆく。区画260上のⅣ区とⅤ区との境界を西へ走る溝が段差を超えて区画117へ延び、西の低地へ向かう。平行して複数条の溝が残っている。西半部に偏って土壙が分布する。導水路屈曲部にある方形の遺構は戦時中の防空壕である。長方形に明かり掘削後、壁際に支柱を立て天井を設置、土盛りするものである。入口は斜めまたは横方向に開口する。北の１基は導水路に開口している。

図146　Ⅴ区全景（北から）

溝218（図147） 高度差を超えて直線状に西へ下る。断面半円形状で間にレンズ状の粗砂層を挟む。形状、位置関係はⅣ区の区画116・北辺の溝207と似る。覆土中か近世までの遺物が小量出土した。

溝218出土遺物（図149） 3231は、瓦玉である。瓦質土器の体部破片の周縁を磨り削り円盤状に整形している。

土壙229（図148） 不整な楕円形状の焼土壙である。木炭、焼土を含む層をレンズ状に挟み、壁の一部が赤化する。

区画117上出土遺物（図149） 上記以外の遺構からも遺物が出土した。3187は白磁玉縁碗口縁部細片である。3230は土壙225出土の土師器坏である。器表荒れて調整不明。

3232～3234は溝222出土。溝222は溝218と平行する細い溝である。3232は白磁皿口縁部で口唇直下の外面に1条の沈線が巡る。3233は龍泉窯系青磁碗口縁部細片である。口縁端部を僅かに丸める。3234は土師器細片である。片側の平滑な面を内面として図示する。各部を欠失して器形不明。鍔状の造りだしがあり、把手或いは脚となるものか。胎土は緻密で褐色粒子を含む。2862は小穴257出土の土師器鍋小破片である。口縁部から底部近くの屈曲部まで遺存する。内外面に短い単位の刷毛目調整を施し外面では更に指押え調整する。

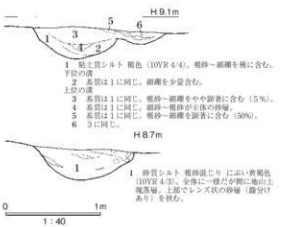


図147 溝218土層断面（1：40）

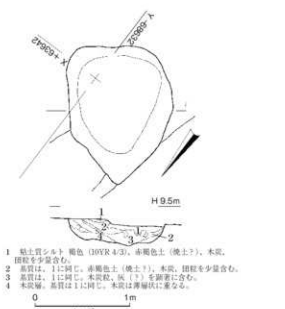


図148 土壙229（1：40）

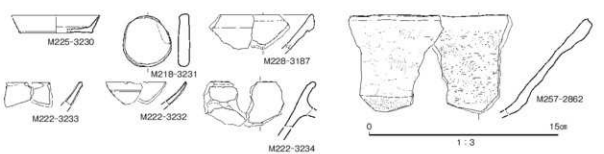


図149 Ⅴ区遺構出土遺物（1：3）

Ⅶ　おわりに

1．調査のまとめ

調査地は既に述べたように、山ノ鼻２号墳を想定される中央の高まりを中心に周囲を壇状の区画に整形された景観として残されていた。ここではこの高まり中心に、行った調査区ごとの成果を現況景観に則してまとめてみたい。

中央部　南北60m、東西20m、周囲からの比高１mの壇状の高まりである。区画107・118とⅢ区北辺部の範囲である。南端部に盛土110が遺存した。北半部では近世を遡る遺構は確認できなかった。南半部では焼土壙のほか溝などを確認した。盛土部は古墳の痕跡、築造年代のわかる資料は出土しなかった。下位の地山層から先土器時代・縄文時代遺物が高い密度で分布していた。

盛土の南側Ⅲ区に弧状の段が残り、対する北側には黒褐色土を覆土とする溝144が残る。これから古墳を復原すると径18mほどの墳丘を想定することができる（図10）。

北側平坦地　Ⅰ区とⅣ区区画115が相当する。近世以降の改変以外は確認できなかった。古墳の痕跡、関係遺物の出土はなかった。

東側壇状地　Ⅳ区区画106・109以東で、大きく２段の壇状地に改変されていた。区画106に集中して遺構が遺存した。ほかに北東部に古墳時代土壙墓が遺存した。区画106は少なくとも中世末には区画溝を設けた壇状に掘削造成されていた。北側の区画109は字図の検討から少なくとも明治期までは一段高い区画107と同じか、それにつながる地形にあったことが分かり、106の範囲に収まっていた可能性が高い。土壙墓113・114が上部を欠くこともそれを裏付けている。

南側平坦地　Ⅲ区とⅣ区南辺部、Ⅴ区東半部の範囲である。僅かに鞍部を成し、緩く北東へ傾斜する緩斜面を中心に柱穴、土壙等が分布する。遺物から中世を中心とした時期が最も密度が高い。台地西縁に寄って、木棺墓、石蓋墓３基が纏まって分布する（SX002・SX003・石蓋墓154）。東の斜面を下った位置に径14mの古墳が築造される（ST001）が、区画106に伴い北側を破壊されている。山ノ鼻２号墳の基底部を想定される区域であるが、古墳の痕跡、関係する遺物の出土は確認できなかった。

西側壇状地　Ⅱ区、Ⅳ区区画116・117の範囲で、Ⅱ区は段丘崖から下位の段丘面に相当する地形と思われる。この区域は細かく壇状の造成が行われている。Ⅳ区の壇状部もそれの一部と思われ、遺構は確認されなかった。Ⅱ区の北西部を中心に遺構が分布し。遺物は縄文時代、古墳時代～中世の時期幅を示している。この区域では、山ノ鼻２号墳の痕跡、関係する遺物の出土は確認できなかった。

2．山ノ鼻２号墳について

上記にまとめたように、山ノ鼻２号墳に関して、その痕跡、遺物を確認することはできなかった。Ⅳ区で確認した盛土部も敢えて復原するならば、微高地南端に立地する円墳となり、区画107出土の小型丸底壺もそれに関わる可能性を考えることができる。墳丘裾部とする地形も現況図と重ね合わせてみると、段丘崖が形作る地形の線と相似形であることがわかる。過去、特に近世以降連綿と続けられた耕地開発の過程で、等高線に沿って切り盛りを繰り返しながら耕地面積を拡張するという行為の痕跡の可能性が考えられる。さらに前方部基底面とする平坦地が後円部に当たる段丘面に取りつかない。もし勾配をもって続くのであれば、現況壇状地形にそれの反映が残ると思われるがそれがない。

以上、調査結果から、想定されてきた山ノ鼻２号墳については、存在した可能性はないものと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	とくながびぃ 1
書名	徳永B 1
副書名	徳永B遺跡第3次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1190
編集者名	杉山富雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号 TEL 092-711-4667
発行年月日	20130322

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
徳永B 3次（とくながびー さんじ）	福岡県（ふくおかけん）福岡市西区（ふくおかしにしく）徳永（とくなが）	40130	2585	33°34′31″	130°15′31″	20090907 / 20101119	5,890	区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳永B 3次	集落 古墳 包含層	先土器 古墳 古代 中世	古墳、土壙墓、木棺墓、石蓋墓、土壙、溝	ナイフ形石器、縄文土器、石鏃、土師器（古墳～中世）、陶磁器（中世） 玉類（古墳）、鉄器（古墳）、鏡（古墳）	

要約	

付図　徳永B遺跡第3次調査区全体図（1:200）